續史籍集覽

69
50
7
圖書館
分類
排架號

帝國圖書館藏

京職錄

相京職鈔一

執權　執事
管領

政所　別當　令　知家事　寄人　公人

問注所

奉行　執事
所衆　問所代
寄人

公文所
公事奉行
○侍所
所司
開闔
○小侍所
○扇谷侍所
○評定所
評定衆
右筆

公文奉行
別當又四職
所司代
別當
評定奉行
式評定衆

執權

一人

天下ノ政事ヲ知ル也鎌倉將軍家ノ時北條家此職ニ補シテ叙ニ從四位下又正五位下ニ任ニ諸國守ニ右京權太夫等任スル例アリ然シテ後京都將軍家ニ至テ此號ヲ止ム鹿苑院殿御元服記ニ執權從四位下武藏守頼之ト見ユルハ好事ニ稱スルモノ歟

東鑑卷首云關東執權次第

時政 治二十六年自治承四年至元久二年
七十八歳

義時 治二十年自元久二年至元仁元年
六十二歳

泰時 治十九年自元仁元年至仁治三年
六十六歳

時房 治十七年自元仁元年至仁治元年
六十六歳

前武藏守

泰時

經時 治五年自仁治二年至寛元四年
二十二歳

時頼 正五位下相模守時氏二男建長八年十一月廿三日落髮年三十歳號最明寺法名道崇又號覺了年三十七歳
時頼 治十一年自寛元四年至康元元年

重時 治九年自寛治元年至康元元年建長八年三月十一日落髮法名覺六十四歳

政時 治六十九年自康元元年至文永十年

長時 治二十五歳九年自康元元年至文永十年

時宗 治廿一年自文永元年至弘安七年

政村 右京權大夫 治三十四歳

時宗

義政 治五年自文永十年至建治三年

時宗 相摸守號寶光寺殿

時宗

業時 治五年弘安六年至仝十年

業時

貞時 治十八年自弘安七年至正安三年

貞時 相摸守號最勝園寺殿

貞時

宣時 治十五年至正安三年

師時 治十一年自正安二年至應長元年

時村 治五年自正安三年至嘉元三年 四月廿三夜被誅

師時 相摸守

宗宣 陸奥守治八年自嘉元三年至正和元年

宗宣

熙時 治五年自應長元年至正和四年

熙時 正和元年六月宗宣卒依之

基時 正和四年七月十一日御後元亨被仰下 同十九日任相摸守

貞顯 嘉曆元年同四年四月十六日 出家號金澤殿

高時 治十一年自正和五年至嘉曆元年

貞顯

高時

守時 治八年自嘉暦元至元弘三年

維時 治二年自嘉暦元至同二年

守時 相模守武藏守號赤橋殿

守時

茂時 治四年自元徳二年至元弘三年

鎌倉大日記云

執權 北條四郎四十三歳

時政在判

將軍 頼朝

執事 二人

等持院殿尊氏公執權ヲ止テ執事トス寶篋院殿義詮公亦此號ヲ用ユ

太平記正行參芳野條云今ハ末々ノ源氏國々ノ催勢ナントヲ向テハ可叶トモヲボヘストテ執事高武藏守師直越後守師泰兄弟ヲ兩大將ニテ四

國中國ノ

又上杉畠山饒高家條云將軍ノ御兄弟執事トシテ萬ツ心ニ任セタル事ヲ猜ミ

海人藻芥云細川武藏守頼之迄ハ執事ト稱ス其以後管領ト稱ス如此

事依時事歟

管領三管領又三職ト號ス 三人當職一人

鹿苑院殿義滿公 細川武藏守頼之始右馬頭入道ヲ常久ト號ス ヲ以テ當職ニ居

玉フ其後斯波代々右兵衛佐ニ任ス故ニ武衛ト稱ス畠山補ニ此職一

太平記頼之上洛條云爰ニ細川右馬頭頼之四國ノ成敗ヲ司テ敵ヲ亡人ヲナ

ツケ諸事ノ途轍少シ先代貞永貞應ノ舊規ニ相似タリト聞ケル間則

天下ノ管領職ニ令居御幼稚ノ若君ヲ可奉補佐ト群議同趣ニ定シ

カハ右馬頭頼之ヲ武藏守ニ補任シテ執事ノ職ヲ司ル

室町記貞治七年四月十五日云攻尅左馬頭御元服役人加冠細川右馬頭頼之時于

管領今日任武藏守

蜷川親元日記 文明十五年五月廿七日云東山殿御移徙中略管領畠山左衛門督殿政長河内御在城 雑

掌土肥六郎右衛門尉御大刀 行光 五千匹

義輝御元服記云加冠之者先例於三職之中當職之人令勤處也雖然

當時管領無二似而十一月中旬被仰付佐々木彈正少弼定頼長祿二

年以來申次之記云三職細川右京大夫勝元朝臣當管領也斯波左兵衛佐義

敏朝臣畠山右衛門佐義就云云

常照愚草云三職之内衆何も御對面は於庭上也一人にて前御坐數

御對面の人〻自昔代至于今無之甲斐一人に限る三間の御廐の板

の上にて懸御目候也

東山殿年中行事云正月十一日御評定始三管領評定衆以下未刻出仕

但應仁亂前定

大内問答云三職之御衆御出之時は何方まて出向可致哉また御歸の時

は如何の事三職の御衆御出の時ハ御縁又ハ庭上まても可被出向候

也又文明三年の比勝元朝臣當職にて御坐候時赤松殿へ御出を見申

つる庭上に出向はれ候ひし其後又文明十九年比政元一色義長へ御

出の時も同前に候つる此時も政元當職にて御坐候つる間常には可

相替候歟又俄に御出の時は奏者故實に而先御坐しきへ申入其後御

出も可然候歟何も時宜により可相計候哉同御歸の時ハ御椽にて一

度庭上にて二度以上三度の御禮たるへし但堺中門迄も可被送候歟

年中恒例記云正月一日御太刀金 三職五日進上之

申次記錄云御太刀金覆輪 進上之 三職

先當職之人より持參して御前に置之御禮被申候て則指寄て御

頂戴して欲被退候處伊勢守まても又伊勢同苗にても候へ御次

の間に廣ふた居りて御練貫有之をそはに置て兩の手にて給て頂

戴ありて扨左の手にハ練貫を持右の手にてそはに置たる盃をと

りて退出也左樣に候へは御供の間にて同苗衆ふと走り寄てとり

て供の衆わたす也其次第の衆被」參様同御練貫拜領の様以下同之
常照愚草ぬりこし御免の事三職ハ不」及御免」
大舘伊豫守一冊云三職斯波武衛の事也 畠山殿細川殿
書札之事云大名之事 斯波殿 武衛の事也 細川殿
此三家の事三管領ども三職ども申なり
文安御番帳 三管領
斯波治部大輔武衛之事 細川右京大夫 畠山上總介
何」官位ハ四位也
諸書當用抄云執事職むかしは年番に被」持也其時ハ當職の人をもふ
かまにてもうやまひ申也諸大名其通りにうやまい申候也取つゝき
てもつ事ハ無」之事ふり
御弓場始記云管領當職被」持事五年十年又は一年半年もたせらるゝ
也三管領打かへ〳〵被」持云云

政所

職掌見紛注集

室町記應安四年十一月一日云御即位御沙汰被」始行於管領亭奉行人山城中中務少輔于時政所

室町殿元服昇進拜賀記云御裝束要脚政所萬さたより奉行三人連署申付候

紛注集云政所之沙汰之事

利錢　出舉

替錢　替米

年記之地　本物還

質券地　諸質物

諸預物　書放券

沽却之田畠

此等之往還皆以當所之爲舊例」儻紛者也但京都鎌倉雜之公事□□

凡　將軍家之御累務之條悉於同政所其沙汰在之ふり諸國之年
　諸商買等之公役之類當所之沙汰也
條々聞書云政所　伊勢守殿

執事　一人

政所之長官也故二頭人ト稱ス
東鑑弘長三年十一月九日云加賀前司行賴所勞危之間政所執事筑前二郎左衛門尉行實可致沙汰之由被付仰
御番帳云　政所　伊勢守　政所代　蜷川親右衛門尉親元
政所頭代御次第云
等持院殿御代
建武以來
政所執事
佐々木京極并大和守補任云云時代不分明康永四

政所執事
二階堂山城守　貞和五
政所
二階堂大藏少輔　觀應二
政所
執事代　齋藤四郎兵衛入道玄秀俗基秀

別當　一人

執事之一稱歟鎌倉將軍ノ始多別當ト見ユ尚可考
東鑑建久二年正月十五日云被行政所吉書始前々諸家人俗恩澤之時或被載御判或被用奉書而今令儲羽林上將給之間者沙汰召返彼狀可被成改于家御下文旨被定云云
政所
前因幡守平朝臣廣元

執事代

室町記　云齋藤四郎左衛門尉可奉侍所之由被出之故元吉書被行武藏相模伊豆持參齋藤四郎左衛門尉于時政所執事代同日被仰關東

蜷川親元日記文明五年八月七日云政所代事如先可執行之由被仰付親元御禮申之御使大藏丞

又同年同月廿五日云政所對決於執事代清泉宿所有之云云

政所頭人次第云執事代

齋藤四郎兵衛入道玄秀俗甚秀

寶篋院殿御代

貞治三

政所執事代

齋藤五郎左衛門尉基名　貞治七

政所

二階堂中務少輔入道行照俗行元

執事代

齋藤々內左衛門入道玄龍俗甚能

御番帳云政所代蜷川親右衛門尉親元

令

以下政所之下司也准公家ノ四分京極ノ四分ハ長官次官判官主典也可加其職掌下已不記者皆效之

東鑑建久二年正月十五日云令　主計允藤原朝臣行政

案主

東鑑同條云案主　藤井俊長鑑田新藤次

知家事

以上令案主知家事等室町之記無所見疑ハ是鎌倉ノ名歟

東鑑同條云知家事　中原光家岩井小仲太

開聞

條々聞書云政所

寄人

東鑑建久五年三月九日云

寛正記云政所寄

齋藤親元日記云

之由政所寄人之

被官人

齋藤親元日記云

公人

被官人公人ハ

齋藤親元日記前

寛正記云政所公

問注所

職掌見庭訓往

塚外政所ハ

事ヲ知ル歟

東鑑正治元年四月一日云

始有其沙汰是

成鼓騒現無禮

議之處熊谷與

被停止御所中

室町記應安三年二十八月

庭訓往來云七月日ノ

可註給之

又回鱗云問注所

證文等謀實亂明之管領寄人右筆奉人等評判也
紛注集云但京都鎌倉雜務之公事等凡將軍家御累務之條悉問注所に
おゐて其さた在之也

執事

准政所可知

東鑑建久二年正月十五日云問注所執事中宮大夫屬三善康清法師法名善信
又寛元元年二月十五日云御沙汰問註勾勘錄大事二箇月中事者一ヶ月小事廿
日此日數可令勘進之由可相解之旨被仰含于問注所執事加賀民
部大夫

奉行

東鑑仁治二年十二月十三日云六波羅御沙汰之間問注奉行緩參遲參之由依有
其聞定時尅令到

所代

室町記云御評定始中略御現役問注所代町野掃部大夫

所衆

東鑑建暦元年正月十日云政所問注所吉書始也行光善信等參行之今日橘三藏
人被加問注所衆

寄人

東鑑承元四年十二月廿一日云今日爲伊賀次郎宗光之奉中民部大夫仲業可相
兼問注所寄人之由被仰含云云是掃部頭親能入道家人也依右筆藝
被召仕之

公文所

東鑑之外無所見

東鑑元暦元年十月六日云未尅新造公文所吉書始也安藝介中原廣元爲別當着
座中略邦通等爲寄人參上邦通先書吉書廣元披覽御前次相模國中神
領佛物等事沙汰之

別當

見二東鑑一公文所別當政所別當共ニ廣元朝臣也未詳

東鑑記上

寄人

東鑑記上

公文奉行

親基日記文正元年七月廿六日云公文奉行事以蔭涼軒飯之種被仰付之布施申次也

公事奉行

東鑑建久二年正月十五日云公事奉行人前掃部頭藤原朝臣親俊筑後權守兼同朝臣親俊前隼人佐三善朝臣康清文章生同朝臣宣衡民部丞平朝臣盛清左京中原朝臣仲業前介清原眞人實俊

侍所

軍事盜賊勾引放火喧嘩闘諍以下御成之時隨兵ヲ勤ムル事等ヲ司

ル尤勇士ノ競望スル職也

太平記土岐頼遠參合御幸致狼藉條云頼遠ヲハ侍所細川陸奥守清氏ニ被レ渡テ六條河原ニテ終ニ首ヲ被レ刎ケリ

又貞朝俊基下向之條云只放召人ノ如クニテ侍所ニ預置レケル

室町殿御元服昇進拜賀之記云侍所細川右馬助

室町記貞治七年正月十日條云侍所沙汰始頭人今川中書宿所義教公御元服記大將御拜賀之

侍所帯甲冑于時赤松左京大夫入道性具依烏法體斟酌舍弟伊豆守義雅勤其役義雅着淺黄糸鎧

御番帳云侍所赤松兵部少輔

條々聞書侍所赤松兵部少輔殿

紛注集云侍所權斷條目之事

一謀叛　一夜討　一強盜　一強竊　一山賊　一海賊

一殺害　一刃傷　一打擲　一蹂躙　一勾引　一放火

一喧嘩　一於道路辻女捕之事

此等之類流刑禁獄之次第於此所令沙汰者也

庭訓往來云侍所者謀叛殺害山海雨賊强竊二盜放火刃傷打擲蹴蹋勾引路次狼籍鬪諍喧嘩等也

別當又四職ト號ス　四人當職一人

山名赤松一色京極ノ四家補此職是ヲ四職ト云此事未得明證

東鑑治承四年十月十七日云和田小太郎義盛補侍所別當

文安御番帳云四職

一色左京大夫　山名右衛門義督入道　佐々木刑部少輔京極殿御事

赤松

應仁記云武家ノ御所ニモ管領四職ヲ先トシテ近習外様ノ人ニ色裝ノ粧刷ヒ

萬躾之書云いかんとなれは三職四職供奉の衆家々けんして今殘る

名家も數多からず

所司

東鑑文治元年四月十五日云和田小太郎義盛與梶原平三景時者侍所別當所司也

又建仁二年正月十五日侍所別當左衛門少尉平朝臣義盛所司景時梶原平三

所司代

別當被官人補此職赤松家ニ浦上京極家ニ多出スノ類也

太平記荻野三宅謀反之條云武藏國住人ニ香勾新左衛門高遠ト云ケル者唯一人地藏菩薩ノ命ニ替ラセ給ヒケルニ依テ死ヲ遁レケルコソ不思儀ナレ所司代之勢已ニ未明ニ四方ヨリ押寄テ十重廿重ニ取卷ケル

親元日記文正元年十二月十二日云夜所司代多賀豐後守高忠依山門訴訟逐電

又文明十五年正月十八日云前司代浦上より兵庫殿へ鯛二鯉一進上之

又同月二十七日云東山殿御移徙戌時御門役所司代浦上美濃守則宗

年中恒例記云北堂御經堂へ渡御先松梅院へ渡御松梅院より經堂へ御張輿又還御に松梅院にて御直垂をめされて一献まいる日堂殿三職已下御相伴祇候御警固所司代

諸聞書條ニ云腹ヲ切る人へ中略其時の儀式如此夫も昔の例を引ての儀なり其時所司代多賀豊後守也六條河原にて切なり切手は豊後守也かいんの裏打に大口を着する也なしうちゐほしに鉢巻を着す太刀はいか物作りたる也甲士三百人にて警固在之

開闔

條々聞書ニ侍司代開闔松田丹後守貞康

小侍所

掌ル事侍所ニ同ジ

室町記應仁四年正月二十三日云小侍所沙汰始於山名右衛門佐入道宗被始行之山名次郎時義

東山殿年中行事云公方様へ爲御禮伺公於御對面所拜賀之畢而於小侍所一人宛春日ノ御局ニ參會シテ述慶詞云云

東鑑嘉禎四年正月十八日云近作左京兆被候小侍所主計頭師員毛利藏人入道西河

別當

東鑑承久元年七月二十八日云有宿侍等定於前代者可然輩皆雖差別于西侍當時壖内不及手廣之間無侍仍各候小侍可令昵近守護由云云則今日所始補小侍別當也陸奥三郎重時

又天福二年六月卅日云陸奥五郎依病痢辭小侍所別當而此事爲重職子息太郎實時年少之時難讓補之由雖有其沙汰武州雖重役年少可加扶持之由依申請給所被仰付也云云

義教公御元服記云次小侍所于時昌山左馬助着狩衣紅紋鶴菱

室町殿元服昇進拜賀記云小侍所山名彈正少弼

扇谷侍所

關東管領基氏朝臣置之歟此事明證ヲ得ストイヘトモ扇谷ハ管領居所云云

鎌倉年中行事云小侍所並評定奉行扇谷侍所千葉介方出仕

評定所

室町ノ記ニ未所見ナシ

東鑑嘉禎四年三月廿九日云匠作前武州着ニ評定所一給評定衆等參進

奉行

室町記應安四年十月十九日云評定奉行山門奉行寺社諸亭賦已上三ヶ條佐々木治部少輔高秀

鎌倉年中行事云評定奉行政所問注所其外ノ衆中ハ皆西ノ御門ヨリ出入

評定衆

東鑑仁治二年五月廿日云佐藤民部大夫業時依レ有ニ其科一被レ除ニ評定衆一是落書己下現弃怪云云

南朝凡傳云尊氏方評定衆伊賀左衛門尉光泰男四郎光長も討れぬ

室町記應安四年正月十一日云齋藤右衛門入道被レ召ニ加評定衆一

太平記神南合戰之條云北ニ當レル峯ニハ大將義詮朝臣ノ陣ナレバ道譽則祐以下老武者頭人評定衆奉行人

申次記錄云御評定始未刻管領幷評定衆ニハ摂津二階堂波多堂町堂其外奉行衆以下出仕

庭訓往來云異見議定之趣評定衆以下可レ注ニ給之一

東山殿年中行事云御評定始三管領評定衆以下未尅出仕但應仁亂前マヽノ事ナ

式評定衆

式ノ字義未レ得レ詳

室町記卷首云町野越前入道可レ爲ニ式評定衆一之由被ニ仰出一云云

右筆

掌ニ執筆ヲ

齋藤親基記云代々御内書右筆次第

伊勢守貞行法名常誠與連ノ親父也自應永二年至六年

以下略之

年中恒例記云御評定始儀式之事中略其後右筆方之衆一人ツヽ御前ヘ參テ祝詞ヲ作リテ披露之各裏打也

寛正年中記錄天文追加云右筆方

飯尾加賀守　飯尾大和守　松田對馬

飯尾中務大輔　諏方信濃守　松田丹後守

中澤備前守　松田九郎左衛門　治部大藏丞

松田主計允　治部三郎左衛門　諏方兵衛尉

飯尾與三左衛門

評定始御判始次第云次評定衆并右筆衆御太刀進上之

相京職鈔二

御臺樣御相伴衆

御相伴衆

御供衆

御部屋衆

申次衆

詰衆

近習侍

經廻士

間見參結番

臺下番衆

引付頭人

學問所番

格勤侍

御簡衆

出居衆

引付衆

御小袖御番衆
御物沙汰衆
御格子番
御所侍
御承仕
御末之男
同朋
遁世人
喝食
上様御被官人
管領御被官人
大名被官人
雑掌

唐物奉行

家司

御相伴衆

御相伴ノ事ヲ掌ル諸家ヘ御成ノ時亦其亭ニ候ス御臺所同ク成ラセ給フ時ハ候スルニ及ハズ

長禄以來申次記云御相伴衆山名右衛門督道全細川讃岐守成之一色左衛門大夫義直畠山左衛門佐義統佐々木大膳大夫持清

道照愚草云三職并御相伴衆ともに立文含度御出居衆

東山殿年中行事云次御相伴衆國持衆准國主外様衆御供衆一人宛出席御禮御盃御服（緋貫各一重）拜領

申次記錄云御相伴衆

山名右衛門督入道宗全　細川讃岐守成之

一色左京大夫義直　畠山左衛門佐義統　佐々木大膳大夫持清

諸門跡座主御衆之事云御相伴衆

管領（細川殿其外御持候也）　治部大輔殿（武衛ノ御事）

一色左京大夫殿　山名左衛門督殿　畠山左衛門佐殿

此御仁躰先儀之御時は大門の外まて被ㇾ出候而可ㇾ然候次すわり物之事御ゆつけの時はめし計たるへしそれもあたらしきを可ㇾ被ㇾ用候此外は木具たるべし萬の御あつかいの事は座主の樣躰たるべし位は座主ふとの樣にいあられとも管領以下の儀に候條諸家の賞翫無ㇾ是非ㇾ候

目錄等之事進上書たるへし

進物式の引出物等を被ㇾ遣儀も可ㇾ有ㇾ之候此外何にても候へ進物ハいろ〳〵あるへく候か

亭主御相伴に參り候事ハ可ㇾ有ㇾ如何ㇾ候哉又就ㇾ仰可ㇾ候ㇾ時宜ㇾ候いかにもゆんきんに可ㇾ被ㇾ仕事專一の仕付也御宿の時ハ御宿へ御跡に付して參申御禮可ㇾ被ㇾ申候其日の進物の事亭主持せて參申事も候又左樣になき事も候可ㇾ候ㇾ時宜ㇾ盃之御禮可ㇾ有ㇾ御申事ㇾ勿論也太刀

馬の事も又太刀計の儀も候

御歸りの時ハ大門まて可ㇾ有ㇾ御出ㇾ候又御座疊之御こしうへに不ㇾ及ㇾ申ㇾ候

御番帳云御相伴衆

山名右衛門督入道常照　一色修理大夫義貫
畠山修理大夫入道性興　治部大夫義豐
畠山尾張守持國　畠山左馬助持永　畠山彌三郎持富
畠山阿波守義忠　土岐美濃守持益　六角大膳大夫滿綱
京極治部少輔持光　山名修理大夫入道常秀
山名彈正少弼持豐　細川刑部少輔持有　細川淡路守滿俊
山名上總介熙高　富樫介持春　武田伊豆九郎信榮
佐々木加賀入道有統　佐々木黑田備前守高光
佐々木鞍智駿河守高信　佐々木佐渡入道

上杉中務大輔

文明十二年頃御相伴衆

管領畠山左衛門督政長 德本彌子　細川九郎殿政元

山名左衛門督殿政豐　一色左京大夫殿義春

細川兵部少輔殿勝久　赤松兵部少輔殿則秀

公私鞠書雜々云御相伴衆

管領右京大夫御事　治部大夫武衛ノ御事

寛正年中記錄天文追加云當時御相伴衆

佐々木左京大夫　北條左京大夫　尼子修理大夫

諸大名御相伴衆

御相伴衆ヲ諸大名御相伴衆ト稱ス別ニ此職有ルニ非ス云コヽロハ御相伴衆ノ諸大名也

文安御番帳云諸大名御相伴衆

勘解由小路右衛門督　畠山左衛門督

一色左京大夫　畠山修理大夫能登

赤松二郎法師　管領右京大夫

山名右衛門督入道　細川讃岐守阿波守

佐々木彈正小弼　大内左京大夫

以上

御臺樣御相伴衆

御番帳云御臺樣御相伴衆妙善院御事

大和佐渡守　千秋中務少輔

松田肥後守　安藤薩摩守

松田六郎左衛門　三上兵庫助

御供衆

親昵ノ衆也御成ノ御供又御陪膳等ノ事ヲ掌ル伊勢安齋記云御供衆は等持院殿元弘元年北條高時かまねきによつてかまくらより軍勢と引つれ上洛し高時に加勢とし給ふ時かまくらより御供申たる人と御供衆といふ其子孫を代々御とも衆といひて將軍家の御きん習にめしつかはるゝ人といふ云々先軍多く此職を用もといへとも予是と信せず

義輝公御成記云御供衆奥於御座鋪一松永彈正竹内三位相伴湯漬點心進之

常照愚草云御供衆より三職へハ可爲付狀一又山名一色殿ふとへハ人々御中又ハ謹上たるべし

御番帳云　御供衆

細川淡路入道全了　桃井治部少輔常領　畠山播摩入道祐順

畠山右馬頭持純　大館上總介入道祐善

畠山三郎入道常滿　大館駿河入道常安　大館七郎

大館刑部少輔持房　小笠原備前守持長　中條判官備平

三上近江入道同道　三上美濃入道年世　伊勢七郎貞親

伊勢因幡入道　伊勢下總守貞世　伊勢左衛門尉貞彌

御供衆二ヶ番被分也

一番衆十一人

左衛門佐持定　民部少輔持經　細川讃岐守持常

細川淡路中務少輔持親　細川右馬頭持賢

山名中務太輔照貴　伊勢守貞經　富樫八郎教宗

赤松伊與守義雅　山名播摩守滿政　山名七郎

以上十一人畠山殿御成ニ始テ參勤

二番

一色左京大夫持信　畠山治部大夫持幸　山名刑部少輔持熙

細川下野守持春　細川治部少輔氏久　赤松伊豆守貞村

赤松三郎則繁　有馬兵部少輔教實　赤松廣瀨兵庫頭持方

伊勢備中守貞國　伊勢勘解由左衛門尉貞（本ヽ）　

以上十一人

永享三辛亥正月丙子伊勢守貞經亭三條坊門萬里小路へ御成自貞經所遷御以後

御參内并御院參御車後歩儀上下也

細川淡路守入道全了　桃井治部少輔入道常鐵

畠山播摩入道祐順　畠山右馬頭持純　大舘上總介入道祐善

年號同前

諸門跡座主御衆之事云

御供衆　次第不同

細川民部少輔殿　一色兵部少輔殿　赤松刑部少輔殿

赤松有馬彌三郎殿　上野民部少輔殿　山名宮内少輔殿

武田六郎殿　山名七郎殿　畠山播摩守殿

伊勢備中守殿　伊勢守殿　細川兵部太輔殿

伊勢兵衛助殿　伊勢七郎殿　伊勢因幡守殿

大舘上總介殿

此内當時斷絶之方在之

御供衆之事

此方々の時ハ是もへ い中門の外迄被ㇾ出候而去やし可ㇾ被ㇾ申候國持の衆と同前にあつかひの事も候亦それより少ふる處も有るべし

すわり物以下の事國持と同前也目錄ハ御太刀一腰御馬一疋とある べしおくにハ名字官實名迄可ㇾ被ㇾ書也

盃御禮の事　可ㇾ依ニ時宜一候

申次記錄云御供衆

細川右馬頭入道々賢　同息政國長孫之項ハ六郎也中務少輔未任右馬頭歟可尋極也

細川下野入道常灯國カ　同息民部少輔教國安房守春親父也

畠山宮内太輔教　一色兵部少輔義遠　山名宮内少輔豊之

細川讃岐九郎　畠山播摩守教元　大舘兵庫頭教氏
上野民部太輔持賴　山名七郎豊氏　細川淡路守成春
一色五郎政氏　畠山中務少輔政光　武田治部少輔國信
赤松刑部少輔（伊豆事也）　赤松上總介元家（有馬事也）
富樫中務太輔　伊勢貞親朝臣（貞親朝臣在之朝臣ハ無用之由可被宛なり）
同備中守貞藤　同兵庫助貞宗
齋藤親基日記云酉刻神幸之間自善法寺御參向
御車　御供衆　走衆　御小者　中略
御供衆
一色兵部少輔（常御劔但自善法寺御參向之御劔者）　畠山宮内太輔教國
細川淡路守盛春　山名宮内少輔豊之　山名七郎（因幡守護跡相續豊之舍弟）
武田治部少輔國信　赤松刑部少輔家眞　富樫又次郎家悉
伊勢備中守貞藤

此外
細川上野入道常灯　上野民部太輔入道
路次之間皆弓鞠等着了
年中恒例記云御道ハ走衆モ、タチヲ取太刀ヲハキテ被參候御立石より太刀を右ノ手ニ下ケ殿立ヲおろし被參也御供衆もゝたちおろさるゝ也
寛正年中記錄云當時御供衆
細川小四郎　朽木民部大衆
畠山亭御成記云御輿御供衆
細川右馬頭　御劔　二番大舘上總介　三番細川三郎
四番細川四郎
以下略
佐々木少弼御成申獻立記云御供衆

大舘與一伊豫入道殿　大舘左衛門佐殿　大舘兵庫頭殿
上野與三郎殿
以下略

東山殿年中行事云並ニ數ノ土器各載四方御陪膳御酌御供衆勤ル之
條々聞書云公方様にて椀飯の時中略又此時の御酌のとられ候やう
今の御供衆御覺悟有りかたき由金仙寺わびこゝ候し
又云御供衆
一番
細川右馬頭殿政國　大舘刑部太輔殿政信
山名宮内少輔殿豊之　畠山三郎殿
武田彦太郎殿親信　赤松孫次郎殿元祐　伊勢七郎殿貞陸
二番
細川兵部太輔殿　細川淡路守殿成春　畠山又次郎殿
富樫中務少輔殿　赤松次郎殿　赤松刑部太輔殿
伊勢守殿貞宗御番はつれ

御部屋衆　二人
普廣院殿義教公初而置此職尤重職ナルカ故ニ御紋拜領之衆補ニ此職二人ノ内一人毎夜御前ニ伺候シ宿直ヲ勤ムル也
長錄申次記云御部屋衆一色越前入道丁爲式評定衆の内被仰出
御番帳云御部屋衆
細川治部少輔政信　一色兵部少輔義遠
申次記錄云御部屋衆
一色治部少輔政熙　上野刑部少輔政之
以上此部や衆と申ハ普廣院御代より被定置候其時より人數ハ
兩人也人々の名字申又其家々の數々ハ不定事也時に志たがひ
てたれにも被仰付候何も御紋の衆ふり兩人の内毎夜一人宛御

前に御宿直被レ申也御所様御若年の時ハ惣番中より詰衆として下略
諸門跡座主御衆之事云公方様の御部屋衆此かた〳〵の時ハ申次と大略
同前に御拵有べし目録の事是も同前也又送り禮等ハ申次へのと同前也
年中恒例記云御對面の次第御對面所へ御出座の時御供衆御部や衆
申次掛御目一也
申次記録云御部屋衆兩人於二表向一御對面之事正月朔日計也
御番帳云御部や衆
細川治部少輔政信　一色式部少輔義遠
條々聞書云御部屋衆
細川治部少輔政信　一色式部少輔義遠
寛正年中記録云御部や衆
一色式部少輔　細川兵部太輔　三淵彈正左衛門
上野與十郎　栃木彌六　同彌十郎

大舘三郎
大舘尚氐記二御部屋衆　上野刑部少輔
一色治部少輔政熙
御部屋衆と申ハ普廣院殿被二定置一也今以不レ過二兩人一大方御紋
の衆也隔夜一人宛出仕候て勤二御宿直一云云御若年の時ハ惣番
より詰衆とて
佐々木少弼御成申献立云御部屋衆
大舘九郎殿　一色式部少輔殿　細川伊豆守殿
細川刑部少輔殿　三淵彌二郎殿　大舘彌三郎殿
申次衆
職掌本書二詳ナリ又公家申次ト云ハ將軍家へ昵近ノ殿上人臣是
ヲ勤ム
條々聞書公方様にてハ申次と申私にてハ奏者と申也殿中にてハ攝

家門跡をハ殿上人申御次候但御指合候へハ武家も申次候長老をハ
蔭凉軒申次れ候是も指合候へハ申次申候也
御番帳云申次
大館刑部太輔　畠山中務少輔　伊勢因幡守貞誠
伊勢右京亮貞遠　伊勢上總介貞弘
諸門跡座主御衆の事云
殿中申次御拵の事
此方〳〵の時ハ御供衆同前に御あつかひ候て可然候御供衆も申
次をも被仕候條御拵に急度相替る事これあるへからず目錄の認様
の事御供衆と同前たる御太刀一腰御馬一疋と彼調候方と申次の
内にも可有又太刀計御の字を彼入候て馬にハ不被入方も可有
候おくにハ名字官實名を被書事も名字官計被書候方も可有候申
次の内にも高下候又被備候時ハへい重門のあたりまて可被出候

申次記錄云其時申次衆當時の申次をはしめとして御對面所のさい
のきわに伺公ありて是も一列に被懸御目也
又云今日於三間の御廐一献在之一番衆申沙汰之一番衆下略
公私翰書雜々云申次之事一番大館兵庫助殿畠山播摩守殿畠山中務
太輔殿二番伊勢兵庫助殿伊勢備前守殿伊勢備中守殿三番伊勢七郎
右衛門尉殿伊勢下總守殿
詰衆
御幼稚ノ時惣番ノ中有器量者此職ニ補ス御用心ノタメナリ
申次記錄云御所様御若年の時惣番中より詰衆とてちか〳〵別に召
つかはるゝ義在之其詰衆にハ此御部や衆の各別の身躰也
年中恒例記云御對面次第御對面所御出座候時御供衆御部屋衆申次
衆懸御目也獻之近年ハ御用心に付て詰衆在之出仕の時ハ申次之
次に懸御目也

文安御番帳云詰衆

今川關口刑部太輔　伊勢掃部助　曽我兵庫助　中條與三郎

三好亭御成之記云詰衆大勢在之間兩度三献在之相伴以下與二書之

近習番

東鑑貞應二年十月十三日云爲駿河守奉行撰可祇候近々之仁被結番號之近習番

格勤侍

東鑑建長三年八月九日云格勤侍小野寺左近大夫入道

室町記應永二十八年十二月廿五日云御方御所様爲未御禮嵯峨香嚴院並寶鏡寺江有御成中略御カクユミ人歩行小林五郎持御劔高橋四郎御靭負御弓小林彌三郎

經廻士

東鑑治承四年八月六日又以來十七日寅卯刻黙可被誅兼匡之日比訖其後工藤介茂光土肥次郎實平岡崎四郎義實宇佐美三郎助茂天野藤内遠景佐々木三郎盛綱加藤次景廉以下當時經廻士之内以殊重御旨輕身命之勇士等各一人次第召拔閑所

御簡衆

東鑑建長四年十月十二日云被定御簡衆於小侍者未造畢之間可着到御厩侍着到者可爲二通者毎夜於常御所簀子讀申之後可進置御前一通者可献相州御方云云

問見參結番

東鑑建長四年十月十二日云又問見參結番同被定下掃部助實時主奉行之

問見參結番事

一番　卯酉　中山左衛門尉　彌次郎左衛門尉

梶原右衛門尉

二番　辰戌

城次郎　肥後次郎左衛門尉　信濃四郎左衛門尉

澁谷左衛門尉

三番　巳亥

和泉五郎左衛門尉　武田五郎三郎　小山七郎

四番　子午

大曽禰次郎左衛門尉押垂藏人　遠藤右衛門尉

五番　丑未

後藤壹岐守　同五郎左衛門尉　式部兵衛太郎

平岡左衛門尉

六番　寅申

伊賀次郎左衛門尉　薩摩七郎左衛門尉　武藤七郎

御出居衆

東鑑寛元三年正月廿一日云今日大納言家可注進又祖代々奉公次第之旨被仰合廣御出居衆

道照愚草云三職并御相伴ともの立文合廣御出居衆

臺下番衆

東鑑云貞應二年五月十四日若君御物忌也中略臺下番衆并侍大番輩者可參籠其外人々出入一切停止之向後御物忌可守此式之由云云

引付頭人

政所ノ下司ナランカ未詳

東鑑建久五年十二月廿二日云前和泉守藤原行方爲四番引付頭人行盛入道前筑前守藤原行春補五番引付頭義景入道卒ノ替引付一番名略之以下略

引付之衆

鎌倉年中行事云上古ハ御引付之衆御飯椀御荷用ヲモ御免アリ

學問所番

東鑑建保元年二月二日云昵近祇候人中撰藝能之輩被結番之號之學問所番各當日不去御學問所令參候面々隨時御要和漢古事可語申之由云々

武家被奉行

御小袖御番衆

永錄日記云御小袖御番衆

大和治部少輔高宗　伊勢次郎左衛門尉貞清

高伊豫守師宣　二階山城守　片岡大和守時親

片岡與五郎輝親　名谷兵部太輔光政　二階堂右馬助

竹藤兵郎少輔　下津屋越前守

御物沙汰衆

東鑑建暦二年九月二十六日云御物沙汰衆就奉公勤厚賜祿物是月迫宣式也而去年事延引云云

御格子番

相京職鈔三

國持衆　國持外様衆　准國主

在國衆　大名　小名

外様衆　番頭　惣番

節朔衆　走頭　走衆

走行衆　侍雜司　雜色

主達　與力衆　中間

小人頭　小人衆　小者

若黨　僮僕　小舍人

足輕　公人奉行　脚力

飛脚　朝夕人　御庭之者

河原者

國持衆

申次記錄云國持衆

斯波修理大夫入道（斯波にては號下屋形義敏の親父なり）　細川民部大夫

山名彈正少弼教豊（右衛門督入道宗全一男也）　同次郎政豊

山名相摸守教之　細川刑部少輔（和泉守護父一男也）　山名刑部少輔政清

山名彈正忠是豊　土岐美濃守成頼　佐々木中務少輔勝秀

武田大膳大夫信賢　佐々木四郎政高

公私輸書雜々云國持衆（次第同）

細川阿波守殿　同刑部少輔殿　同兵部太輔殿

同淡路守殿　山名相摸守殿　山名兵部少輔殿

山名七郎殿　土岐美濃殿　佐々木龜壽殿

大内龜殿　武田大膳大夫殿　富樫介

赤松次郎法師　上杉民部太輔殿

國持外様衆

御番帳云　國持外様衆

山名彈正少弼　山名相模守

山名兵部少輔　山名彈正忠

土岐美濃守　佐々木六角

佐々木京極中務太輔

寛正年中記錄云國持外様

山名彈正少弼　山名相模守

細川刑部大輔　山名兵部少輔

赤松次郎法師　土岐美濃守

武田大膳大夫　佐々木京極中務少輔

富樫介

准國主

細川民部少輔

赤松次郎法師

武田大膳大夫

富樫介

細川民部太輔

山名彈正忠

佐々木六角

申次記錄云准國主人數

細川中務大輔成經奥州之事　佐々木加賀守

又云次に細川陸奥守京極加賀守依被准國持雖爲外様衆五ヶ日出仕也又御

盃頂戴同前

東山殿年中行事云御相伴衆國持衆准國主外様衆御供衆一人宛出席

在國衆

御番帳云在國衆

治部大輔殿義良　畠山左衛門佐殿義統　京極殿政經

文安御番帳云在國衆

遠藤大和守　二宮安藝守　長九郎左衛門尉

熊谷次郎左衛門尉　櫛原駿河入道　長孫九郎

平賀新四郎　長四郎二郎　多賀見孫太郎

大名

申次記錄云花之御前に而ハ諸大名國持外様御供衆申次まて御末の東の脇戸より被參候又云同四日公家大名外様之内御供衆年中恒例云公家大名外様御供衆御部屋衆申次衆番頭節朔衆走衆等也今日計也

小名

源平盛衰記兵衛佐殿催家人一條云時政祝ヒ申ケルハ東八ケ國ニハ黨モ高家モ大名小名君ノ御家人ナラヌハヤ候ハサントモ

文正記云大名小名自他用心孰之身上共更ニ無覺悟

外様衆

申次記錄云外様

畠山次郎　末野　赤松新藏人七條事也

佐々木鞍智紀伊守　土波民部大夫　攝津掃部頭之親

赤松治部少輔入道有馬の事也　同彌次郎

年中恒例記云正月一日大名外様

又云次大名外様次惣番

寛正年記錄云外様衆

北畠左衛門佐　細川中務太輔　新田大島左衛門佐

伊勢仁木右馬頭　山名伊豆守　一色右馬頭

新田岩松兵庫頭　吉見太郎　山名宮田五郎

丹波仁木兵部少輔　四條上杉中務少輔　仁木美乃守

佐々木京極加賀守　土波民部太輔　赤松新藏人

赤松中務太輔　佐々木鞍智　攝津掃部頭

二階堂大夫判官　町野加賀守　波多野

文明十一年記錄云外様赤松又次郎此外御供衆被參也

番頭

五ヶ番ノ頭也毎組一人歟

公私翰書雜々云番頭衆細川淡路守殿二番桃井左京亮三番畠山播摩守四番畠山中務太輔殿五番大館下總守殿上總介事歟此かた〳〵ハ下略

寛正五年記云一番之頭よりハ御使

東山殿年中行事云當番申次出于闕際錦々披露シテ退中略番頭節朔衆一人宛奉賀之

申次記錄云番頭以下ハ中の御末より掛むしろの内へ被參てうら辻の外にて頂戴也御酌ハうら辻の右の方の脇に出かゝりて入らせ給也

又云番頭已下ハ御所樣の御盃頂戴の人數にてハこれなしといへ共上樣の御盃をハ頂戴なり

東鑑寛元二年八月十七日云新田太郎爲令勤仕大番在京是爲上野國役之故也而稱所勞俄遂出家但不相觸事由於六波羅並番頭城九郎泰

欠

MISSING

小坂殿　　市近江守殿　　波々伯部次郎左衛門殿

走衆故實云走衆の故實仕來る儀ふれハ委しくハ存候ハねとも先申傳へ侍るハ烏帽子（かけは心のまゝ也）上下にてハ引をさし太刀をはきかへしもゝたちを取りて參日くれて御ちやうちんまいり候へハ金鞭をとり手にさけて參候也狼藉人の成敗ハ時によるべし衣裝ハ老若ともにうすからく出立たるがよしあわせの下に出るきかたびらを重きたるかよく候由次第ハ闔取にて候敷皮笠を用意すべし走笠とも笠のこしらへ樣又慈照院殿樣御代にハ走衆のおとこ大方同程ふるをめしつれられ候笠なとも一ツを本としてそろへさせられ御輿のさき左の衆ハ左にさし右の衆ハ右にさゝせられつるとて候惣別走衆のこと公事役の樣にむかしハふかりき鹿苑院殿樣勝定院樣御時ハ畠山將監殿なと祇候後にハ御さき打に被參候つるにて候今川關口殿なとも被參候つるにて候伊勢黨被參例無やうに沙汰候近比お

かしき事數多候伊勢新左衛門殿も被レ參候普廣院殿様の於二赤松亭一
御生害之時も伊勢平三左衛門と申せし人被レ參候也後にハ下野守
になられ候遠山市正殿などハ其時討死候し平三ハさも候ハて志は
らく存命ぬて法名をちくかんと申ハ十計まてけふ氣に候て普廣院
様御生害の時の様躰ハ利口ふりて物語候由親にて候者語申候つる
常德院御代にハ伊勢彈正殿も是に祇候候由皆々物語候

歩行衆

東鑑建長四年七月廿日云有二御方違一供奉人者無二先度一之儀歩行衆之中上野
七郎左衛門尉出羽三郎左衛門尉等申障越中四郎左衛門尉始者進奉
後又申障之間臨二出御之時一被レ召二具加藤三郎一云云

侍雜司

三好亭御成次第云侍雜司二百疋遣レ之也
義輝公御元服記云侍雜司祇公申二人女子一人宛召具

雜色

公家にハ上雜色下雜色小雜色等ノ名アリ又行列ノ部二注ス
義經記云人あまたにて叶ふましとて雜色一人召具して
御成次第記云雜色といふは中間の下也又雜色の役也

主達

東鑑寶治元年五月廿七日云左新衛御輕服之間日來令レ寄二宿若狹前司泰村亭一
給今日彼一族雖レ有二群參之形勢一更無二祇候于御前一之事一中略此程自
方々告申之趣强無二御信用一之處符合之間思召合俄退二彼館一令レ還二本
所一給主達一人號五郎四郎僅持二御太刀一御供云云

與力衆

細川亭御成記云東雲新與力衆北面御築地之外御警固申是と御折三
合天野三荷被レ下也

中間

主人ノ弓箭劍等ヲ持而御供ニ候シ亦警固等ノ事ヲツトム按スルニ中間ト云ハ士ト小者足輕トノ間ト云儀ナルベシ

三好亭御成次第云裏御門役御中間衆也

御成次第云中間六人赤ひたゝれを着て三人ツヽ左右へ分て行也六人の中間の内一人太刀を持主人の左の方也

御弓場始次第云矢とりハ大かたひたゝれきの中間に器用を一人定め候也よのよりもひたゝれのくゝりを少高くあけ候也

小人頭

三好亭御成記御小人衆頭六人大間東部屋湯漬點心相伴長谷川六左衛門也

御小人衆

三好亭江御成記云御小人衆其外物衆御膳北面有此方被付用意候也

貞助雜記云御小者を人躰により御小人とも申すべし平人もその心得あるべし御對面記云又御小者をも御小人と申人をハ小者と申候なり

御小者

小人ノ中依二人躰一是ヲ稱ス

義輝公御元服記云御走衆御小者肩衣四布袴也

齋藤親基記云酉刻神幸之間自二善法寺一御參向御車　御供衆　走衆

御小者

又云御小者六人左三人此内一人持御張　替右三人此内帶弓靭

年中恒例記云禁裏於二庭上一着座之次第中略

貞興返答書云公方様御小者六人にさたまり候それに志たかひ大名五人四人三人二人めしくせられ候可二然候

永祿日記云御小者

千若　梅若　鶴若　熊若　龍若

飯尾亭御成記云御小者方以若黨増之各練貫
御供故實云御小者も御こしの左上り候御点やう持候小者の内にて
も久被召仕候者ちと手寄たる者持申也

若黨

太平記田舎ノ條云中間若黨ハ主ノ女房ヲ昇負ヒテ逃ル者ヲ
又信忍自害ノ條云諸方ノ攻口破レテ敵谷々ニ入ミタレヌト申ケレハ入道
普明寺討殘サレタル若黨諸共ニ自害セラレテケルカ

僮僕

庭訓往來云花下好士諸家狂人如雲似霞遠所之花者乘物僮僕難合
期先近隣之名花以歩行之儀思立事に候
御弓場始次第云とうほくの者十人九人ハ赤ひたゝれにおとしの大
かたひらをかさねさやまきくみふしあほしにかけをすべし次太

刀持白直垂にねひめに文を黑す

小舍人

庭訓往來云官領執事奉行人撿斷所司賦訴狀於右筆之時以小舍人
或下部等召出犯人於侍所記錄申詞依言色躰嫌疑

足輕

永禄日記云足輕衆

秋本兵衛尉　曽我左衛門尉　野垣太郎左衛門尉
小川三郎五郎　田村勘左衛門尉　内山彌五太兵衛尉
廣田善兵衛尉　大西虎助　永島新七郎
大貳　橋本與二　鈴木勘右衛門尉
三上式部丞　一卜軒　中島但馬守
鴨飼猪助　的場三郎左衛門尉　澤路隼人
北畠仙千代　田井孫九郎　中村勘右衛門尉

美濃部重右衛門尉　喜春軒　竹内勝兵衛尉
澤村重助　北村助兵衛尉　谷口民部丞

公人奉行

室町記（應安四年十月十四日）云公人奉行布施彈正大夫入道

穴太記（前將軍薨去之條）云公人奉行松田宗禪

寛正年中記錄（天文追加）云右筆方

公人奉行飯尾加賀守

年中恒例記云禁裏様於二庭上一着座の次第中略走衆の後のへんに御小者公人朝夕已下有一之

脚力

又飛脚ト稱ス

東鑑（文治元年正月六日）云去年十一月十四日飛脚今日參着ス中略十一月十四日御文正月六日到來今日從一是脚力を立と志候つる程に此脚力到來仰せ遣たるむね悉承り候畢

朝夕人

年中恒例記云御小者公方朝夕以下在一之

鎌倉年中行事云其跡に朝夕其跡ニ御雜色

義輝公御元服記云松明役者御朝夕四人

御庭之者

正月御事始記云さて御庭の者五六人罷出候而恵ふりを持候てそれにて砂をひろけ其上をはうきにてよくはきて

河原者

河原ニ住スル故ノ名歟地名ヲ以テ人品ヲ稱スルナルベシ

孫々聞書云妻戸の出入の事中略其家の位により大少有的の時の數、塚より大方河原者にくわしく知るべし

相京職鈔四

御廐奉行　別當所
御廐者　舍人
奉行衆
御所奉行　營中雜事奉行　別當
社家奉行　寺社奉行　八幡奉行
山門奉行　東寺奉行　神寶奉行
永福寺公文　禪長者奉行　南都奉行
普請奉行　作事奉行　住持奉行
造宮惣奉行　作事右筆
番匠奉行　大工奉行　番匠
木屋奉行　檜皮奉行　檜皮師

案主　神家奉行　圓學寺奉行　造宮奉行　大工

鍛治奉行　鍛奉行
地奉行　路次奉行
保々奉行
恩澤奉行　恩賞奉行
法會奉行
狩奉行
遊君別當

御廐奉行

室町記（應安四年十一月廿五日）云御廐奉行被仰伊勢入道奉行人齋藤右衛門入道

御廐別當所

東鑑（養和元年平七月十四日）云於御前成給御下文成尋奉行之下總國御廐別當所可早免除貢馬事行平所知貢馬右件行平所知貢馬者令免除畢仍御廐別當宜承知勿違失

別當

東鑑（養和元年七月二十日）云右件行平所知貢馬者令免除畢仍御廐別當宜承知勿違失

室町記（應永廿年十一月廿七日）云貢馬次第事佐治藏人ヲ御廐別當伊勢守貞經ヨリ進之也

東山殿年中行事云御鞭一色治部大輔政熙役之御廐別當次郎四郎牽ヲ御馬場中門ヨリ參入

申次記錄云年始御乘馬始在之中略御馬をハ次郎四郎引而參るを御
縣より被召なり
又云御服一被下御廐次郎四郎
案主
東鑑治承四年九月廿二日云左近少將惟盛朝臣爲襲源家欲進發東國之間
攝政家被遣御馬御廐案主兵衛志清方爲使羽林出逢御使御馬ヲ
請取云々去嘉祥二年十二月十九日彼高祖正盛朝臣奉宣旨爲追罰
對馬守源義親發向之日參殿下申暇退出之後被遣御馬於彼家御
使御廐案主兵衛志爲貞也
御廐者
三好亭御成次第云御廐者之通篠原左近丞奈良一右衛門衆仕也余田
出合申也
御成次第云又雜色之役也雜色無之時ハ廐之者より可付候廐之者

より雜色ハ上り也
貞孝朝臣相傳聞書云雜色廐之者との差別の事雜色に馬かた被申付
例も在之といへとも廐の者と申又別人ふりざう色ハ少上なるべし
舍人
太平記左中將馬屬強之條云水練栗毛トテ五尺三寸有ケル大馬ニ手繩打カケ
テ門前ニテ乘ントシ給ヒケル此馬俄ニ屬強ヲシテ騰跳狂ヒケルニ
左右ニ付タル舍人二人蹈レテ半生半死ニ成ニケル
三好亭御成記云御力者手銅車かへ舍人
已上御廐之被官
奉行衆
永錄日記云奉行衆
飯尾加賀守貞廣　飯尾大和守堯連　諏訪信濃守晴長
中澤備前守光俊　松田丹後守藤弘　飯尾中務大輔盛就

治部大藏丞允榮　　松田左衛門大夫頼隆
治部次郎左衛門丞藤道　　松田主計允光秀
飯尾與三左衛門尉爲忠　　諏訪神兵衛
中澤玄蕃允　　諏訪神四郎
布施彌太郎　　松田又次郎

三好亭御成記云　三好介　奉行衆

太平記（神南合戦之條）云峯ニハ大將義詮朝臣ノ陣ナレバ道譽則祐以下老武者頭人評定衆奉行人其勢三千餘騎油幕ノ内ニ布皮ヲ敷キ

御所奉行

御所ノ事ヲ奉行スル職歟（今案御家仕御所侍等此被官ヲ受ヘキモノ歟）

成氏年中行事云二月八幡宮三七日御參籠社務社家奉行出仕政所問注所御所奉行其外

營中雜事奉行

東鑑（建仁三年十二月廿三日）云營中雜事北條五郎可令奉行之由被仰付

八幡奉行

男山ノ八幡歟

室町記（應安四年十一月四日）云布施彈正大夫入道可爲八幡宮奉行之由被仰出之

神家奉行

見聞諸家紋帳云獅子牡丹神家奉行諏訪信乃守忠卿

社家奉行

鎌倉年中行事云二月八幡宮三七日御參籠社務社家奉行出仕政所問注所御所奉行其外宿老中廻廊ニ幕打參籠アリ

寺社奉行

東鑑（建仁三年十一月十五日）云鎌倉中寺社奉行之事更被定之仲業清定爲執事記之鶴岡八幡宮

室町記 應安三年三月十五日 云布施彈正大夫入道可ㇾ爲二評定衆一之由被二仰出一之
雜賀縫殿入道可ㇾ爲二寺社奉行一之同前
神寶奉行
東鑑 養和二年二月八日 云長江太郎義景爲二神寶奉行一同首途云云
山門奉行
山門ハ比叡山延暦寺也
室町記 應安三年八月六日 云山門奉行佐々木治部少輔諸亭賦中兵庫頭入道
東寺奉行
室町記 康暦元年九月十七日 云飯尾左近入道可ㇾ爲二東寺奉行一之由被ㇾ仰出一
南都奉行
室町記 應安四年十二月廿八日 云飯尾左近入道可ㇾ爲二東寺奉行一之由被ㇾ仰ㇾ之
圓覺寺奉行
圓覺寺ハ鎌倉五山ノ第二ナリ五山ト云ハ建長圓覺壽福淨智淨妙

此五箇寺ナリ圓覺寺ニカギリ奉行ノ職見ユル事未ㇾ知二其故一
室町記 永和元年五月二十二日 云布施彈正太夫入道爲二圓覺寺奉行一
永福寺公文職
東鑑 元文元年八月三日 云今日鎌倉中寺領等事有二其沙汰一左京進仲業補二永福寺
公文職一且令ㇾ奉二行寺中沙汰一且可ㇾ明二寺領年貢進未之內一被二仰付一云云
禪律長老奉行
律宗禪宗ノ長老ノ奉行ナルベシ於二禪家一ハ東堂和尚是ヲ紫衣ノ長
老ト稱シ前堂座文是ヲ黑衣ノ長老ト稱ス律宗ノ長老ト稱スルモ
ノハ未詳ニセズ
室町記 永和四年十一月十三日 云禪律長老奉行飯尾美濃守貞行可二沙汰一之由被二
仰下一
住持奉行
室町記 應安四年十二月十九日 云住持奉行右筆中澤掃部太夫入道

普請奉行

年中恒例記云正月十一日御普請始御作事始在之御作事奉行御普請奉行御作事右筆伺公御ふたん衆ハ畠山殿より參る

正月御事始記云上略則又御大工に御馬を被下之御作事奉行伊勢加賀守結城七郎祇候御太刀をハ加賀守御大工に遣之例年此分也

作事記行

寛正六年記云大竹口四寸三本御進上結城勘解由左衛門御作事奉行方

永祿四年御成記云作事奉行池田丹後守米村但馬守

御作事右筆

年中恒例記云御作事奉行御普請奉行御作事右筆伺候

造宮奉行

東鑑寛元四年二月十日云紀伊國安立川庄地頭職故右將軍御時爲高野大塔造營奉行賞賜高雄文學房記

造宮惣奉行

室町記應安四年十月廿五日云石清水八幡宮神殿立柱上棟中略造營惣奉行左近將監

番匠記行

鶴岡修行快元記天文二年十月廿八日云鎌倉番匠奉行久頼山田圖書助被仰付

大工奉行

鶴岡修行快元記云自去廿一日奈良大工奉行被相定一番開新三郎横田木工助二番神尾治部入道近藤太郎左衛門三番鵜野入道治部太郎左衛門

番匠

太平記千劒破城軍條云爲之京都ヨリ番匠ヲ五百人召シ下シ五六八寸ノ材木ヲ集テ

建保職人盡歌合云番匠黒かねのふをき（木マヽ脱字アリ）を身ふれどもかたふく月に

かふはりそなききりすのひふけしのこくちすろりつゝいかにをや
ともあほてこそあらめ
庭訓往來云可」招二居聟一者鍛冶鑄物師切匠番匠木道幷金銀銅細工
大工
年中恒例記云ことすみて後御作事奉行幷御作事方右筆衆御太刀食
進上之千疋御下行在之御大工これを受取
木屋奉行
鶴岡行修快元記云八足門指圖之此方木屋奉行孫九郎殿代太田亦三
郎方世
檜皮奉行
鶴岡修行快元記云爲二檜皮奉行一神保入道社頭江被」越了
檜皮師
年中恒例記云年中日シヨク月シヨクノタビコトニ御殿乃ムネヲ三

所計コモニテツヽミ申也ヒワタシノ役也公人相別也
鍛冶奉行
鶴岡修行快元記天文二年二月十七日云爲二檜皮奉行一神保宮内入道社頭江被」
越了鍛冶奉行者自二去年一九郎殿之者開處者窪田所之者三人也
銀奉行
鶴岡修行快元記云銀奉行朝倉與次郎太田兵庫助東南田村□□須藤
惣左衛門尉西北大導寺□□蔭山□□地藏院後藤善右衛門須田入道
此人數左右ヲ一方完請取銀細工可」磨者也仍如」件天文五年十月十二日
鐵渡奉行
鶴岡修行快元記云鐵渡奉行小別當大道寺大草丹後後藤善左衛門大
田又三郎也
地奉行
東鑑文永二年三月五日云鎌倉中被」止二散在町家等一被」免二九ヶ所一又堀上家前

大路造屋同被停止之且可相觸保々之旨今日可被仰付地奉行人小野澤左近大夫入道也一所大町一所小町一所魚町一所穀町一所武藏大路下一所須地賀江橋一所大倉辻

路次奉行

東鑑建長四年四月二日 云今日前將軍并若君御前御母儀二位殿御上洛中略路次奉行筑前々司弘泰河村前司祐村

保々奉行

東鑑寛元三年四月廿二日 云鎌倉中保々奉行人等令存知可致沙汰條々今日被定佐渡前司基綱爲奉行

保司奉行人可存知條々

一不作道事

一差出宅檐於路事

一作町家漸々挾路事

一造聽小家溝上事

一不夜行事

右以前五箇條仰保々奉行可被禁制也且相觸之後七日於立之者相具保奉行人者使者可被破却之狀依仰執達如件

寛元三年四日廿二日

佐渡前司殿

武藏守

恩澤奉行

東鑑嘉禎元年九月十日 云長尾三郎兵衛尉光景雖致度々勳功未預恩賞事駿河前司義村并同次郎泰村屬恩澤奉行後藤大夫判官基綱頻執申之仍有沙汰可有勸賞之旨被仰付基綱

恩賞奉行

室町記應安六年六月廿六日 云飯尾左近入道々羅被召加恩賞奉行訖同七月二日出仕始之

法會奉行

東鑑正嘉二年三月四日云今日勝長壽院供養也曼陀羅供大門閣梨松殿法印良基中略御願文章嚴惠法會奉行參河前司教隆布衣下結刑部權少政茂

船奉行

平家物語さかろの條云二百餘さうのうちよりたゞ五そう出てぞはしりける中略かねこ兄弟ふな奉行の衆なる船也

遊君別當

東鑑建久四年九月十九日云召二里見冠者義成一向後可レ爲二遊君別當一中略其後遊君事等至二訴論等一義成一向執申之云々

右法會奉行恩澤奉行ハ臨時ニ是ヲ補シテ恒ニ不レ置モノ歟淺見未レ詳

明治二十六年八月校了

近藤瓶城

甲斐國妙法寺從文正元年至永祿四年記錄

妙法寺記上

文正元丙戌閏十月廿五日

甲州當郡久遠立正寺開山先師日朝上人御死去未尅御供弟子七拾人

導師ハ御弟子ノ内本蓮寺玉藏坊

應仁元丁亥

二戊子

文明元己丑

二庚寅

三辛卯十月朔日星月出逢玉フ同年西ニ當テ星燃玉フ其後甲州軍起立正

寺御堂立影

四壬辰甲州花取山信州大炊殿合戰五月廿日

五癸巳甲州大飢饉餓死スルヿ無限

米百三十文壹卡粟七十文大麥六十文也

門松二度立ル ヿ安齋覽筆以下皆小山田與清考

六甲午
七乙未極月十日河口殿ヲ地下打取
三月大水出ル甲州富貴不及申
八丙申門松二度立ル也大餓ニ石木又ハ人ニ喰付自滅スル ヿ不知數ヲ駿
河ノ守護殿遠江ニテ打死同供伊大部朝比奈打死
九丁酉此年賣買高ク而飢饉無限
少童疱ヲヤム ヿ大半ニコエタリ生ル者千死一生武藏長尾四郎左衛
門叔父尾張守ト合戰
十戊戌霜月十四日王京ヨリ東海へ流レ御坐ス甲州へ趣小石澤觀音寺ニ
御坐ス
十一己亥世中十分吉兄弟契約無限
十二庚子三月廿日富士山吉田鳥居立
十三辛丑此年疫病天下ニ流行病死人多

男色

太田道灌打死

聖護院道興准宮東國下向ノ ヿ問國雜記

十四壬寅此年大風度々吹作毛凶飢渴也人民多病死大水出ル光長寺大坊明
此年アク
十五癸卯此年賣買高而世間ツマル ヿ無限疫病多流行也
十六甲辰此年立正寺ニテ尼崎御聖教異本書又私目願御影造立
十七乙巳春ツマル ヿ無限但賣買吉
光長寺大坊宅玉ヿ同多寶造立
十八丙午此年賣買吉但疫病流行千死一生也
大田道灌入道相州糟屋金造寺ニテ大夫殿ヨリ打死八月四日風吹世
間半分代ノ中也光長寺別當小石澤ニテ去被返乃至粟原ニテ被返ア
リ說法願主立正寺
十九丁未此年賣買吉疫病ニテ人多死ル ヿ大半ニ過タリ聖護院甲州武州
ヘ下ル關東乃至奥州迄下リ玉ヿ改元
長享元戊申

サヽラヲフル

福德二年

二　此年大雨頻ニ而粟皆損也

申年疫病流行人民死ヿ不知數

三配　此年世間ツマルヿ不可及言說大麥吉疫病流行人民死ス甲斐國京ヨリ白鷹ヲ進物也三年ニ而改元

延德元庚戌

京ニテハ正亨二年ト延德ヲ改玉ツ也此年ハ多日テリ後ニハ大風又大雨降テ作毛皆實ナシ大飢饉無申計

天下ニ此年老若共サヽラヲスルヿ無限又京ニ王崩御トテ福德二庚戌年ト年號ヲ改ル也殊ノ外ニ大飢饉而其年ノ内ニ米ハ七十大豆六十粟ハ更ニ無シ牛馬渴死ルヿ大半ニ越タリ人民飢死ヿ無限

明應元辛亥　此年モ年號色々也

大飢饉無申計費ナシ

北條御所遷化牛馬飢死ヿ無限

藤澤寺相模藤澤宿ニアリ當麻寺モ相模高座郡ニアリ共ニ一遍上人故跡

壹初ハ四貫文後ハ三貫六百文ニ壹駄賣

此年六月二日大雨降在所皆流レル也

此年歌弦習京ヨリ西洞院トテ習ハセ玉フ也稽古三月十四日ヨリ也

延德四壬子　此年六月十一日甲州亂國ニ成始ル也

當年夏ヨリ世間クツロク也

明應二癸丑　此年甲州以テノ外物騷也惣領度々合戰負玉フ世間福貴ス賣買安シ駿河國ヨリ伊豆ヘ打入也

明應三甲戌　此年賣買吉

吉田村諏方大明神　鐘武州ヨリ鑄テ上ル

三月十六日合戰ニハ武田彦八郎殿負玉フ大藏大輔打死同山中殿打死也此年藤澤道場燒ル同當麻道場燒ル耕作二分ノ實入ナリ

明應四乙卯

吉田鐘樓堂此年卯月申日ニ棟上ス

御所島ヘ落玉フ此年八月伊豆ヨリ伊勢入道甲州打入鎌山ニ陣ヲ張タレ氏和談ニ而引返ス

七月十三日大風吹作一本モ實不入飢饉ス岡光長寺ノ大坊此年定リ玉フ也

明應五丙辰閏月二月

此年北條君武州ヨリ甲州都留郡吉田正覺菴ニ移リ玉ヒテ富士ヘ御出

此年伊勢入道ノ弟彌次郎七月郎等太敷共ニ打死ス此年八月十六日大水又大風吹テ作毛悉損ル也岡大坊客殿霜月大原ヨリ造立而本寺ヘ越奉ル本寺ノ十羅刹堂此年造立也

冬日テリ此年日國坊爲現世安穩後生靈山之本門壽量品奉誦始ル也サテ無懈怠奉讀間漸一萬卷成就スル

ヒ押陽シレ武ケヤ川ヤ川リ
ヤサ軍ヤト州谷クアクノ
レレ盛クアセニドリヅ記
ニ甲ニヅリ田シリシレナ

明應六己巳ノトノ　此年賣買吉秋モ耕作吉稗十分也

明應七戊午閏月十月也

正月元日ヨリ殊ノ外暖ニテ雪不降道吉八月廿五日辰剋ニ大地震動而日本國中堂塔乃至諸家悉顛レ落大海邊ハ皆々打浪ニ引レテ伊豆浦ヘ悉死失ス小川悉損失ス同月廿八日大雨大風無限申剋當方ノ西海長濱大田輪大原悉壁ニオサレテ人々死事大半ニ超エタリアシワタ小海ノ巖皆流テ白山トナル

武田親子此年和睦シ玉フ也

冬雪サシテ不降　大飢饉無申計

明應八己未　七大五小也

正月二日大地震動スル也惣而正月大風吹也賣買殊外高而春ツマル

不及言ニ

大麥小麥共ニヨシ吉田上行寺上ヘ引ルヽ也

七月六日叡山三塔九院悉ク細川殿燒拂也
此年霜月王流サレテ三島ヘ付玉フ也早雲入道請テ相州ヘ送賜也
明應九庚申 六大六小也
此年マテモ大地動不絶五月十八日大風吹
吉田鳥居卯月廿日ニ立六月四日大地動上ノ午年大地震ニモ勝レタリ惣而如何ナル日モ夜モ動事不絶更ニ無限
此年六月富士導者參ㄱ無限關東亂ニヨリ須走ヘ皆導者付也
此年八月勸主樣ヨリ當妙法寺ヲ賜ル也御渡狀共頂戴仕爲後日示置
明應十辛酉 八大五小也
此年作毛草生ハ十年廿年ニモ無並吉但六月土用ノ內夜晝大雨降大水出テ作リ悉水ニ成ル
此年改元
文龜元壬戌 辛酉

此年大雨降共世間十分ニ吉九月十八日從伊豆國早雲入道甲州ヘ打入吉田城山小倉山兩所ニ代ヲ致テ國中大勢ニ而卷門無弓矢シテ皆他國ヘ勢衆十月三日夜散々迯テ皆死
極月小寒內ニマムシ雪中ニ出テ人ノ足ノ邊ヲ廻ルㄱ又蟇飛廻リテ寒ニツメラレテ死余リ不思義サニ書置申也
文龜二癸亥 壬戌 此年ハ世中凶惡風八月吹テ耕作殊ノ外也冬雪不降 淺間宮ヘ猿下テ一兩日森ヲ遊行而失ル狐人ニ成テ人ノ家來ト成又狐人ニ喰付也
文龜三甲子 癸亥 此年葛山孫四郎殿富士上方ノ梨木澤ニ而生害ス又此年常在寺日印樣五月廿二日死去八月卅日夜霜降テ十分ノ世ノ中何モ無ウアイタリ當海十二月十七日ヨリ氷始テ二月近ク迄不解海少モアカス厚サ一二尺ニ氷テ人ノ往來及遊行スルㄱ無限冬中日テリ正月二月迄モ照通ス冬中雪不降

稱撰紙ニ此故事見ユ猫ハ御草伽草紙ノ中ニ草紙アリ

文龜四乙丑甲子　此年始三月迄雪不降世間殊外ツマル此年舟津ツヽノ口ヲ小林尾張入道殿本主ノフサギ玉フ所ヲ取ノケ玉ヘハ花立ノカケナトヲ堀出シ玉フ大ク井水ヲ引也湖ヒルヿ無限此年年號改ル也

永正元甲子　此年富士山ニ六月七月兩月ニ雪五度降ル作毛ヒエ皆損大ヒテリウロノ水ヲ禰宜殿下リテ氷ヲヒラカレ申候カ四五日不解其日雨降ル武州ニ鼠多ハヤリ出テ晝孕ノ女ヲ喰殺而其處ノ時ノ食物ヲ喰猶ヲ鼠皆々喰コロス此年大雪四尺降越後國ヨリ小堀關東ヘ向玉フ十一十二ノ兩月也武藏國兩上椙合戰駿河平ニ伊豆ノ國勢向テ伊豆勢負ル也經木ヲ取テ數ス四萬人打死スル也

此年冬寒キヿ石ヒ及ニ言說此海少モアク處無シ大飢饉百分千分言說不及人馬死ルヿ無限賣買米七十粟六十稗五十文大豆六十文粉六十文

永正三丙寅　此年春ハ賣買去年冬ヨリモ尚高直也秋作ハ悪ク吉但シ春

彌勒二年辰ニ彌勒ノ年詞十年ノ年ヲ云ヿトアリ

ノツマリニ秋吉ケレ氏物モツクラヌ者イヨ〳〵明シ春迄モ貧也此年半ノ頃ヨリモ年號替ルナリ此年冬雪不降暖ナルヿ先代ニモ加樣成ヿ無之湖モ不氷

永正四丁卯

彌勒二年丁卯　此年當國ノ守護殿五郎殿御死去又御本寺鐘ヲ春米ノ岩見守ヨリ寄進スル此人ノ母ノ三十三年ノタメニ六十六部ノ寫經供養二月ヒガンニ門徒ノ衆中皆九字究之頓寫眼ヲ驚ス

永正五戊辰　此年世間奢貴言說ニツクシカタシ一國二國ナラス日本國中賣買安シ此年常在寺日運正月十日死去

此年大雨頻ニ而作毛言語同斷惡シ當山室ノ宮造取持小林尾張入道殿諸國出テ前代未聞ノヿ也此年十月四日武田八郎殿同子息彌九郎殿珍寶丸打レサセ玉フ也此年十月十日日國坊常在寺ヘ移リ住居ス此年秋作悪ク惡シ此極月五日國中ニテ合戰アリ都留郡人數負ル也

小山田彌太郎殿打死同心ノ打死無限然ハ工藤殿小山田平三殿韮山
へ御出仕ナリ小笠原孫次郎死
永正六己巳　此年ハ賣買高シ秋作ハ吉秋ヨリ當郡亂入以ノ外殊ニ川口
ヲ燒クサレ氏國勢引ル、也極月ニ下ノ檢斷殿打ル、也吉田ノ要書
記打ル、也此年當小室ノ上葺檜皮ニテ葺ル、也又極月十六日須走
蓮長寺日壽御死去
永正七庚午　此年迄亂不及申ニ去年極月廿五日ヨリ大雪降深サ四尺鹿
死ㄱ云ニ不及此春中國中都留郡御和睦落付光長寺大坊京都ヨリ三
月十二日御下着有之此郡ノ大麥小麥吉此年官領越後ニテ長尾六郎
ニ打レ玉フ也
永正八辛未　此年正月地下侍共ニ喜ㄱ無限浮世ニ口痺流行人民死ㄱ無
限然間皮(カ)口痺ノ鳥ヲ造リ送ル一日病テ頓死スル諸人契約ヲシテ酒
ヲ飲ムㄱ無限

此年長尾伊賢(ヰヤ)此郡ヲ武州ヘ通リ威勢ヲ取ラル、也此八月大原ヘ天
狗共寄テ三ヒ時ノ聲ヲ作ル也村ノ人々皆舌スクミテ物云ㄱアタハ
ス又富士山ノカマ岩燃(ル)也此年大風二三度吹テ十分ノ富貴四分三
分ニ成ル國々大水八月出テ耕作損ㄱ無限言語同斷也此年十月廿四
日未剋ニ當テ富士大石寺ノ御堂自火ニテ皆燒失前三日ノ間天井ヨ
リ血ナカレテ燒ト云々不思義ノ奇怪也
永正九壬申　去年ヨリ賣買ナシ錢ヲエル故ニ米八十文小麥七十文賣也
三月十八十九日雪雨日降積ㄱ四尺通路悉トマル賣買無キ故ニ世間
大ニツマル鹽四十文酒十文ツ、ホシ葉百文ニ四連六連賣也且紙一
束ヲ百五十文ニ賣也此年二月時正立正寺ニテ七日御本寺聖人御弘
通アリ雨シケク而當海イヨ〳〵滿ル又卯月十九日雷大鳴ル其日酉
剋ニ倉見法祐寺ノ大門ナル大梠燃ルㄱ無限是ヲ驚ク人々祈禱託宣
スル也淺間大井ハ摩竭井ト弓箭ヲ取リ大井マケ玉フテ如此其シル

麻疹日本ニヲ麻疹ト書タルハ此チ始トス古クハ赤斑瘡赤疱瘡ナト云ヘリタウモハ麻疹ノ餘毒ナリ

シニ燃ト云也如何様ノ物怪也

永正十癸酉　此年麻疹世間ニ流行ヿ大半ニ過タリ錢ヲヱルヿ無限賣買安シ買人希也此年耕作何ニテモ惡物一本モ無之廿分ニ出來ス此年天下ニタウモト云大成瘡出テ平愈スルヿ良久其形譬ハ癩人ノコトシ食ハ達者ナル人ノ様ニス、ム也當年ハ世間富貴スルヿ言語不及錢ヲ多クヱル間賣買殊ノ外ニ安シ此年川内ノ穴山道義入道殿子息清五郎殿ニ打タレサセ玉フ米ハ九月迄二升五合也能ク買ハ三升モ賣也此年光長寺旦方中坂ヲ越申サレヽ馬六十九疋人ハ百餘人關所ハ大坊カラクラセ玉フテスク〳〵ト透ルナリ

永正十一甲戌　此年賣買悉安シ米二升五合大豆五升粟同小豆三升稗八升賣買自在ナレ圧錢ヲヱル程ニ代ニツマル諸事安シ世間曖ナルヿ申不及霜月極月雪不降冬中一二度降レ圧一寸二寸ヨリ厚ハ不降此年關東合戰乘房極月打死云々虛說也

同時ヲ同心ト云聞衆ノ方害今モ云ヘリ

永正十二乙亥　此年正月閏月有之此年迄モ賣買去年ノコトク安シ錢ヲヱルヿ未止他國ハ代ツカヒヨシ此年當國大井殿屋形トノ合戰十月十七日申尅也屋形方大勢ナリトイヘ圧皮城ノ廻リヲ不知間皆深田ニ馬ヲ馳入テ無出打死畢ヌ其人數小山田大和守右衛門助殿尾曾殿飯富殿其外隨分内々様二十騎計是大將分方々也其余ハ一二百人打死畢其後駿河國ヨリ甲州ヘノ口々ヲ塞ル、也重ノ調義可有之圧更ニ不見此年ハ十月十二日ノ夜ヨリ雪降大雨ト雪ト同心ニ降ニ依テ大地殊ノ外ニ氷テ芋モホリエス菜ナトモ一本モ取ル間モ無シサシ置ニ依テ菜モ徒ラニステル芋モ如此致候間中々言語同斷飢饉ト成也地下ノ數ノ事無申計此年ハ耕作田畠粟稗惣テ造ル程ノ物ハ何モ惡シ飢饉ス寒事前々ニモ過タリ駿河朝比奈和泉殿此年ノ十月病死畢此年岡ノ大坊駿府ニ弘通所ヲ御建立有之名ヲ經王院ト號テ此年夏中百日ノ間別當様壹人メサレテ御弘通アリ所願成就無障等云

々

永正十三丙子　此年モ春ヨリツマルヿ無限ニ大麥高シ三升五合ノ賣買也未タ大井殿ト御屋形様ノ取合彌強盛也駿河ト此國ノ取合未息米ハ百文粟賣買無大豆六十小豆七十文也自他國路次堅固ニフサガリ未タアカス錢ヲエルヿ彌ヨ此年七月十二日未尅震動致丶明ル十三日迄九度震動ス此年極月十六日巳尅西海右近ト平八迄兄弟三人大石與五郎殿モ打ル丶也去間宮内烝殿同廿九日ニ出陳アル也其後日々合戰而地下ハ皆鵜ノ島ニテ越年スサレヒ日々ノ合戰ニ吉田ノ城ヲ責ルニ城方メテヲ取ル漸年モ替ル

永正十四丁丑　此年正月小林尾張入道殿荒藏出陳シ玉フ然間正月三日ヨリ城ヲ責ル強盛ニテ終ニ正月十二日夜引申丶去間先方ツヒニ切リ勝テ吉田自他國一和ニ定也此年極月十五日ヨリ三日雨ニテ前後雪降積リ巳上四尺五寸降ル鳥獸自喰物ナキニ依テ皆々餓死ス言

語道斷深雪ニテ四方路次悉ソサカル此年賣買ハ何ニモ吉

永正十五戊寅　此年六月朔日富士山禪定ニ嵐以ノ外ニ至テ導者十三人忽ニ死ス其内ニ内院ヨリ大ナル熊出テ導者ヲ三人喰殺ス是ハ熊ニテハ無シ大鬼神ト見ル人有之余不思義サニ書付テ爲物語置申候此年ノ五月駿河ト甲州都留郡和睦也調法者内野渡邊式部丞他國ノ判者人ハ永池九郎左衛門方同禍島道宗入道云々此年七月十三日大風吹テ作毛悉損ス諸作悪シ其年ノ八月廿六夜大霜降テ明ル日迄キエス世間ツマルヿ無限秋ノ賣買ハ米六十七文也當國山里ノ米荷ヲ山家不通米ノ賣買此郡一粒モ無之新作何ニモ實不入ワラビヲ九月迄ホル也惣而此年ホリトラス明ル五月迄ホルナリ

永正十六己卯　此年モ錢ヲエル也此年惣而一國二國ナラス日本國飢饉シテ諸國及餓死也當國ノ内浦ノ兵庫殿屋形様ト取合玉フヘキニ定リ今日ノ明日ノト卯月迄モ不息賣買ハ米百文粟八十大豆七十粉六

雜事多門院日記ニモ見ヘタル食物ノ也雜事ハ食料ニ野菜ヲ搗ナリ

上意ウヘ様ト云フヲ用フ

十五文也其余ハ更ニ賣買一粒モ無之就中雜事一本モ無之冬ヨリ富士郡ヘ往還而芋ノカラヲ買越テ喰、此秋ハ作吉粟賣買四升大豆四升小豆三升惣而國中富貴スル甲州府中ニ一國大人様ヲ集リ居結レ上様モ極月移リ御坐ノ御臺様モ極月御移此年ノ霜月内野寺ヲ引テ上行寺御立

永正十七庚辰　此年モ賣買吉粟四卡大豆四卡米二升小豆二卡五合ニ夏迄モ賣買ノ此年ノ三月府中ニテ以ニ上意一萬部法華經ヨマセ玉フ又當郡猿橋三月中ニ小山田殿引立テカケ玉フ也此年吉田上行寺ノ堂供養三月也法則老僧說道ハ富士ノ所化一位門關梨衆多參テ說法ヲ讀誦スル也此年五月當國粟原殿大將トシテ皆々屋形ヲサミシ奉テ一家國人引退玉フ同六月八日ニ東郡ノ内ミヤケ塚ニテ軍アリ上意ノ足衆切勝テ其日ニ粟原殿ノ城ヲマク此年閏六月ノ事也其後八月十三日ノ夜降始十四日十五日十六日十七日迄降續作毛悉損ルナリ

首ナシルシト云

此年夏當國ノ大炊殿ヲ屋形ヨリ責結玉ヘハ負テ大炊殿城ハ降參メサル、也浦ノ殿モ屋形様ヘ降參アル也霜月大雪降ル極月四尺降ル此年駿河勢數萬人立テ甲州テ合戰有之駿河衆悉ク切負テ福島一門皆々打死甲州ヘ取ルシルシ數百騎霜月廿三日未尅ヨリシテ夜責シ玉フ散々ニ逃ルフ無限

永正十八辛巳　此年ノ二月十八日武田殿大原舟津小林宮内烝殿ヘ御出有之明ル日中津森ヘ御下、又川内ヘ八月廿八日惣勢立テ鑓ツキ其日有之富士勢負玉フナリ關東モ乘房ト川越殿取合不息向陳ハ悉丈夫ノ手負ル也乘舟ヲ多ク取ラル、也此年七月十五日ニ武田八郎殿駿河ヨリ甲州ヘ御歸國有之當國屋形様ノ御意デ御歸、

大永二壬午　此年賣買安シ此年大石新七郎玄蕃ヲ打トテ打タル、玄蕃モ左エ門モ打ル、此年當國屋形様身延ニ而御授法御供ノ人數皆々授法云々此年光長寺大原ニ御坐シテ本寺ノ所化ヲ呼參テ御學文有

之此年ハ作毛殊ノ外惡シ就中粟凶シ何ニテモ吉物ハ無之武田殿富士參詣有之ハ嶺ナサル丶也

大永二癸未　此年大原庄惣而都留郡大飢饉無限米ハ十文賣買也此年春中ニ大原代官和泉殿新造皆作玉フ也　此郡ハ春ヨリ富士郡ヘ行テ命ヲ續ク夏ハ大麥吉四卡賣買也此年少童痘ヲヤム又イナスリヲヤム大槩ハツル丶也

大永四甲申　此年正月ヨリ陣立初而二月十一日國中勢一萬八千人立テ猿橋御陣ニ而日々ニ御働奥三方ヘ働箭軍アリ此時分衆房ハ八十里御陣寄ト承リ申候此年萬事共有之小猿橋ト云處ニ而度々ノ合戰アリ此夏末ニ立正寺ハ京都ヨリ御學文メサレテ御下候

大永五乙酉　此年某御本寺ヘ參詣仕候

此年妙法寺建立此年諏方殿府中ヘ御入有テ住居所望スル間其如望然間大喜無申計此年三月廿五日管領衆房御逝去當國新九郎御和睦

痘モヤムイナスリ

奥三保ハ甲陽軍艦ニモ見ヘ今ト云フ相模ノ國ヲ也ヒ津久井郡ノ寺ノ鐘ノ銘ニ三保ノ郷ニ

シテ錢千貫文當國府中ヘ進上被申駿河ト甲州ハ未和睦無シ費賣ヨケレハ錢ニツマルヿ無限此年武田殿ト新九郎殿ト合戰ヒマナシ府中猿樂下ル日々能アリ未津久井ノ城不落當國ト官領又ノ和睦也此年米九月マテ二升二盃入也

大永六丙戌　御屋形樣在京メサル丶ト風聞ス此年新九郎方ト當國屋形和睦トハ申候ヘ共未タ和睦ナラス京ヘハ御立ナシ　其後七月晦日鹿兒坂ノ麓梨ノ木平ニテ合戰アリ須走殿總而高田一族皆打死黑石入道并葛山御宿殿打死武田殿勝玉フ也三島高田迄モ打死屋形樣ハ猿樂呼下シ日々御坐丶山中御陣ハ未息其月廿四日迄打立不絶

大永七丁亥　此年信州トモノ殿ニ被賴玉フテ信州ヘ立玉フ皮國一ニ成テ友殿行方ヲ不知ラ其後信州一國ノ殿々ノ和睦而トモ殿ヨリ武田殿ヘハ所領ヲ被進候ヲ反サレハ中津森殿樣百坪ニ御家造リ玉フ常在寺ノ御堂モ當年丁亥年建立六月三日ニ信州ト當國トトモ殿見繼

奥ノ方ヲ奥ヲ三保ヒトシナルイ

津久井城ハ古城ト云ヘ小屋山ニ城アリ

弁(エン)損徳政ノフレ

候而御立候處ニ和談云々當國ト駿河ト和睦云々爲其一國ノ内ヲ走馬ヲ御觸候國中万部ノ法華經ト御觸候御堂三年申常在寺立メサレ候此年菊月立正寺旦方山中太郎左衛門五十人ニ而御本寺ニ御參詣被下候下向ニハ河口ニテ掃除致、

大永八戊子　改元　此年以ノ外ニ大日デリニ候六月七月八月迄テリ、此年五月十六日ニ大雨降テ十七日ニ大水出テ悉山畠ヲ損ス也此年ノ三月大原ヘ久遠寺脱カヨリ圓乘坊ト云學者ヲ呼メサレテ稽古イタシ、人數十七人其時分ヨリ日國上人ハクワンラク候而七月迄色々ニ御ヤミ候テ七月六日丑尅御死去ノ間弟子中力落無限野邊御供弟子三十余人導師ハ御弟子ノ内戒藏坊又三日ノ御齋一日頓寫御坐、然野邊ニテハ歌弦メサレ候此年霜月廿四日本能坊日近死去被申候賣買米二升五合粟四升大豆四升小豆二升五合賣候此年御上意ヨリ地下ヘ三年先ハオシツフシ其後ヲハ本ナシト御觸候去間地下衆ナケキモ有喜モ有大槩ハナケキ被申候此年武田殿諏訪殿ヲ見ツキ候而一國ヲ皆々御立候境ニテ合戰アリ去間武田殿負メサレ候其時萩原備中守打死ス九月晦日ノ合戰也

享祿二己丑　此年春ハ賣買安シ殊更大麥小麥吉大麥五升小麥二升一盃賣申候秋ハ何モ十分能御座、此年國中ヨリ路次フサガリ申候此年中津森御大方(オカタ)樣六月廿日ニ遠州ニ御越候而姉ト御對面御座、色々ノ奔走ト聞申去間來ル十月十一日ニ當國ヘ御歸候御大方ノ御迎ニハ近衆百人金作刀一樣ニ衣類茜紬(アカネツムギ)一樣百人富士川ノ端迄御迎ニ出タリ御歸ニハ和泉殿ニ一夜入道殿ニ一夜倉見ノ新九郎殿ニ一夜御逗留候而中津森ヘ御歸候霜月十五日ニ路次アキ候其日棟引參候此年ノ冬世中十分ニ吉去共坂塞リ候間米二升五合大原ニテハ三升拾文サシニ賣買申候大豆五卞小豆三卞五合稗ハ壹斗賣買代一向無御座候去間錢渦飢(カツカツ)ト申候此年二月十日新屋鋪薩摩殿打ル、也此年水

神ヲ鹿島ヘ送ル

上ノ長老シホノ山ヘ御住候

享禄三庚寅　此年ハ正月元日ヨリ暖ナルヿ無限雪一粒モ不降雨日々ニ降候而道吉此年正月七日越中守同國中ノ一家國人猿橋ニ御陣ナサレ、此年ノ春ハ何モ賣買安シ米三升粟六升大豆六升小麥二升二盃賣申候此年ノ三月騮ケ馬場大日堂燒ル同大日モ燒玉フ此年同月中津森ノ御所燒ル御前ノカウシモ燒此年春弓稽古スルヿ無限米倉橋此年三月掛申候卯月廿三日八坪坂ニテ越中殿ト氏綱合戰アリ打負テ吉田衆致打死候此年夏世中吉六月米二卡五合大豆五升小豆三升大麥九卡小麥三升賣買申候此年七八ノ兩月諸國諸神ヲ鹿島ニ人々送申ヿ無限人ノナヤム事不知數ヲ大槊死也關東ヨリ川越殿御重寶ニテ寒房ノ上様ヲ奪取申テ武田殿ノ御乳ナホシ申候此年某本寺ヘ參詣申候而明ル年二月迄致住山候此年伊東ヘ參詣申候

享禄四辛卯　此年正月廿一日ニ浦殿粟原殿屋形ヲサミシ奉テ府内ヲ引退御嶽ヘ馬ヲ入候去間浦信本モ御同心ニテ御座、然ハ此人々信州諏方殿ヲ賴候而府中向メサレ候河原邊ニテ軍アリ浦衆打負粟原兵庫殿諏方殿打死被食候打取頭八百計云々其儘信州勢ハ皆引被申候此年萬力ニ而三河守殿打死被食、此年春人々ツマルヿ無限賣買安米二卡五合大豆二卡五合小豆二卡ニ賣買申、此年少童兒ヲヤムヿ無限千死一生也大麥ハ五卡賣申候此年七月西ニ當テ星一ト燒此年某本寺ヘ參詣申處折節江州ノ小猿樂下候而ナカサハニテ能ヲ致候猿樂ト申若衆ト申言語同斷見物此事ニ候此年ノ正月御本寺御影堂ノ上葺メサレ候本願東御坊

享禄五壬辰　此年春人々ツマルヿ無限雜事一向無テ野ニテ雜事ヲ摘ヿ無限此年大麥小麥共吉秋世中吉日テルヿ無限此方ニ不限天下皆悉サリ申、此年ムケカラ宗ト云者天下ニハヒコリテ諸宗ヲ貴申、殊更法花宗ヲ一向ニ可失該合ヲ被申、去間ムケカラ宗ハ廿萬法花宗

ハ五百計御座候何レモ經文ニ身ヲマカセ候而弓矢ヲ取被申候去間法花宗切勝候而ムケカラ宗散々ニ責失ヒ被申候是ハ京ニテノ丁ニ候此丁ガ天下ヘ聞ヘ候而ムケカラ宗ヲ責失丁無限此年九月浦ノ信本武田殿ニ敵ヲ被食、去間信州ノ衆大勢頼養候而浦ヘ籠リ被食、去程ニ一國寄テ浦ノ城ヲ責被食、サレ氏ハ浦信本劣被食候而屋形ヘ降參申、去間城ヲ屋形ヘ渡シ申候而ヒザシタニ御ツメ被食、一國御無異ニ成候此年八月九月兩月東ニ當テ星燃ル余不思義サニ書付ル此年十月某部屋ヲ致建立此年ムケカラ宗ヲ退治メサレ候而年號ヲ改被食、此年小山越中守殿上様御死去被食、去間此年中谷村ヘ御越候而新屋鋪ヲ御立、頓而成就被成候御上意御ワタマシ御越被食、一家國人皆々御越、此年熊野余良モムケカラ宗燒申候

妙法寺記下

天文二癸巳　此年春此方福貴ス武田殿御所燒ル小山田殿ハ七十坪ノ家ヲ造ル國中越被食、此年二月猿橋燒申、此年三月十六日夜上吉田皆燒ル上行寺ハ燒申、是ハ佛力ト存、此年賣買此方ハ安候大原ノ湖ヒルヿ無限此年五月六月七月八月迄大雨降テ耕作凶去共賣買安シ錢ケカチニテ御座、此年谷村燒候此年武田殿川越殿ノ息女ヲムカヒ申、御供衆中無申計、此年下吉田方々渡邊庄左衛門殿ト水沙汰御座、色々堰ヲ落シツ落サレツ被食、去程ニ小山田殿預リ申候色々様々ノ沙汰候ヘ共終ニハ下吉田勝テ候

天文三甲午　此年正月閏月此春言語同斷餓死致、而人々ツマルヿ無限次ニ疫病ハヤリ候而皆々ヤミ申、去共賣買一切安シ錢飢渇ニテ御座、此年大麥ハ十分ニ越テ能候此年ハ始年八月ヨリ明ル年ノ四月迄蕨ヲホリ候而皆身命ヲ繼、此年ノ秋世中十分ニ御座、ヲ風吹、

而三ケ一ノ世中ト申、去共米三升小豆四升其余ハ賣買何レモ安、
此年御末寺ヨリ西蓮院御越、而本堂ノ葺板ヲ勸進被成、去間百駄
御座、此年五月ヨリ八月迄イキレル丁無限此年霜月當國屋形源太
郎殿上様川越ヨリ御越候而一年御座候而懐胎被食死去被食、此年
ハ雪モ一向フラス

天文四乙未　此年正月ヨリ暄氣ニ御座、二月大風吹テ皆家ヲ損ザシ申
、此年正月四日ノ夜森ノ三郎左衛門自火ニテ三人燒死此年二月廿
九日ノ晝常在寺燒ル造立ヨリ九年目也此年小林道光御死去次ニ難
義ナル咳病ハヤリテ皆死去申、此年八月廿二日相模ノ屋形勢ヲ遣
被食而人數二萬四千御方ハ二千計テ小山田殿軍ヲ被成、小山田殿
劣被食、而彈正殿大輔殿侍者周防殿小林左京助殿下ノ檢斷殿隨分
方々打死被食、殊ニ勝沼ノ人數以上二百四十人打死申、其日上吉
田燒申、明ル日下吉田燒申、此年十月妙授死去被申、世中十分

咳病ハヤル

天文五丙申閏月十月　此年正月暖氣ニ御座、丁イ畑ニ降申、正月十四
日夜大風吹候而皆々家ヲ損シ申、此年二月十一日小林和泉殿死去
此年四月十日駿河ノ屋形御兄弟死去被食、去程ニ其年六月八日花
藏殿福島一門皆相模氏繩ノ人數ガ貴コロシ被申、去程ニ善待守殿
屋形ニナヲリ被食、此年五月ヨリ七月迄雨降候而言語同斷饑死殊
更疫病ハヤリ申候此年六月當國府中ニテ前島一門皆上意ソムキ腹
ヲ切申、去程ニ一國奉行衆悉他國ヘ越被申、此年淨泉ノ田地ヲ六
郎左衛門殿請取被申、此年小林刑部左衛門殿松原サキヲ屋鋪ニ御
立、次ニ相模ノ青根ノカラヲチラシ被食、足弱ヲ百人計御取、蓮
真坊寺燒被申、

天文六丁酉　此年正月暄ニ候疫病ハヤリ申候殊更言語同斷致饑死候而
賣買ナシ此年二月十日當國屋形御息女様駿河屋形ノ御上ニナホリ
被食、去程ニ相模ノ氏繩色々サマタケ被食候ヘ共成不申、而終ニ

ハ弓矢ニ成、而駿河國ヲ奥津迄焼被食、去程ニ武田殿モ須走口ヘ
御馬出シ被食、此年御宿殿此國御越、出陣ノ案内者ニ成被食、此
年尾暮殿満座ニテ打タレ玉フ此年春風再々吹事無限此年常在寺御
堂十月十日卯尅ニ立申、次ニ河越殿相模ノ屋形ニ城ヲ取ラレ玉フ
去程ニ松山ヲ拵御座候此年童子共疱ヲ致、事無限然ニ十月十六日
ヨリ雪降候而寒キ丁近年ニ無シ下吉田クネ木ヲ皆々切候駿河屋形
ト氏繩ノ取合未止

天文七ツチノエ戌　此年正月十七日夜大風吹候而其後二月三月大風度
々吹申、去間冬ノ寒ニ大麥ヌケ候而一向無御座候此方ニ不限大原
モ皆損シ無御座、此春モ皆人餓死致シ候而ツマル丁無限此年迄モ
相州甲州ノ取合不止小麥草生ハ能御座、此年十月十二日夜須走殿
ハ刀殿談合候而上吉田ヘ夜懸ヲ被成、然ニ一宿ノ旁曲斷候而悉
打殺サレ候又此年五月十六日夜新宿ヲ夜懸被致、吉田宿中ノオト

ナ衆ハ下吉田河原ニ在所被成、其後武田殿氏繩和談候而吉田ヘ御
歸

天文八己亥　此年モ未タ雨國取相不止然秋世中半分此年導者ニ下吉田
ニテ附候法花堂ニハ闇ヲ取宿ヲ取被申候在所六ケ鋪御座、事無限
此年冬ハアタヽカニ御座、而民モ喜申、此年極月十五日ニ大風吹
候而大水出テ候此年十月小林刑部左衛門殿松山ヲ御立テ候大原富
貴此方ハケカチト見候

天文九庚子　此年春賣買安シ殊更大麥分十ニ越候賣買六升小麥貳升五
合買申、五月六月大雨降候世中サン〳〵ニ候處又八月十一日ノ暮
程ニ大風吹候而亥尅迄三時吹申、大海端ハ皆浪ニ引レ山家ハ大木
ニ打破テレ堂寺宮悉吹タフシ申、地下ノ家ハ千ニ一萬ニ一御座、
馬數皆死申、世間ノ大木ハ一本モ無御座、去程ニ世中ノ丁申ニ不
及候殊ノイ物一向無御座候淨泉寺モ吹タフシ申、諏方ノ鳥居ヲモ

吹タフシ申、諏方ノ松ヲハ一萬本計ト承候此年五月ヨリ武田殿信州ヘ取懸被食、去程ニ弓矢ニ切勝被食、而一日ニ城ヲ三十六落シ被食候ト聞エ候去共佐久郡ト申候ヲ御手ニ入候小山田殿ノ代ト而小林宮内助殿一城ヲカマヘ候去間此方奇子近付陳立シケク候而皆々迷惑イタシ候此年霜月八日猿橋掛リ申候此年七月御本寺ヘ參詣申、而坊號ヲ賜候人數千人計ニ而候殊大石ヨリ寺ヲ買候而當寺立テ申、此年武田殿御息女信州諏方殿御前ニ御ナホリ、此年鎌倉若宮八幡御遷宮霜月十五日伊勢新九郎殿氏繩ノ御本願ト申傳之候殊雪フラス

天文十辛丑　此年春致餓死候而人馬共死ルヿ無限百年ノ内ニモ無御座候ト人々申來リ候千死一生ト申、此年六月十四日ニ武田大夫殿様親ノ信虎ヲ駿河國ヘ押越申、余リニ惡行ヲ被成、間加様被食、去程ニ地下侍出家男女共喜致滿足候事無限信虎出家被成、而駿河ニ

御座、此年七月十七日相模屋形氏繩御死去被食、此年八月九月度〻大風吹候而世中一向凶ク御座、

天文十一壬寅　此年六月信州諏方殿ヘ取懸被食、武田殿切勝被食候而諏方殿ヲ生取ニ被成、而府中ニテ腹ヲ兄弟御切候又同年七月信州伊奈ヘ取懸被食、伊奈衆切劣テ取首三千ト聞エ申、此年秋世中一向惡ク候而大風三度迄吹申、人々餓死候事無限去レ共賣買安シ餓飢渇ニテ御座、並テ三年致餓死候

天文十二癸卯　此年正月ヨリ賣買安シ米百文ニ今升四ヶ賣買申、其外物ノ安ヿ無限

天文十三甲辰　此年春世間福貴致、大麥一切惡ク御座、而夏餓死致、殊秋散々チカヒ候而世間人々餓死致、事無限不思義ヿイ物能候而干葉ニテ身命ヲ繼申、此年極月小林宮内助殿相模屋形氏貞様ヘ御參候御供ノ旁刀ヲ悉金作ニ致シ被申、去程ニ小田原ニテモ加様成

キラメキハ早雲以後ハ見不申、ト致風聞候

天文十四乙巳　此年正月度々大風吹申、余リ不思義サニ書付申、此年春人々ツマルヿ無限二月十一日富士山ヨリ雪シロ水オシテ吉田へオシカケ人馬共押流シ申、殊ニ其水ニテ下吉田冬水麥ヲ悉押流申、相殘候大麥小麥吉此年五月六月七月迄雨一度モフラス色々雨ヲ乞候へ共一雨モ不降草オヒハ廿分モ越申、此年武田晴信様ハ信州箕輪殿ノ城ヲ御責候卯月ヨリ五月六月迄御責去共落不申、勝沼ノ相州小山田甲州川内ノ穴山殿御アツカヒニテ和談ニ御歸陣被成候箕野輪殿舍弟權次殿ト申候ヲ人質ニ御入候此年八月ヨリ駿河ノ義元吉原ヘ取懸被食、去程ニ相摸屋形吉原ニ守リ被食、武田晴信様御馬ヲ吉原ヘ出シ被食、去程ニ相摸屋形モ大義思召候而三島ヘツホミ被食、諏方ノ森ヲ全ニ御モチ候武田殿御アツカヒニテ和談被成候去程ニ駿河分國ヲハ取返シ被食、其時御本寺悉打破リ坊住モ

悉打チラサレ候沼津ノ本光寺モ悉燒申、御本寺別當様ハ大原ニテ越年被成候

天文十五丙午　此年七月五日大雨降大水出此近邊山クツレ候而田地作毛悉押流シ申、殊ニヲタレノ田地悉オシナガシ申候又十五日夜大風吹候而作毛悉吹コホシ申、去程ニ世間悉致餓死候而不及言語ニ去共賣買安シ此年信州佐久郡シカ殿城ヲ甲州ノ人數信州人數悉被合被成候而取懸被食、去程シカ殿モ隨分ノ兵共ヲ御持候又常州ノモロオヤニテ御座、高田方シカ殿ヲ見繼候而城ヲ守リ被食、去程ニ又常州隨分ノ旁高田ヲ見付候而淺間嶽廻御陣ヲ取候去程ニソレヲ目懸候而板垣駿河守殿甘利備前守殿横田備中守殿多田野三八殿其外打向軍被成、去程ニ常州人數切劣候而名大將十四五人打取雜人三千許打取此首ヲシカ城廻悉御懸候是ヲ見テ要害ノ人數々カヲ失ヒ申、去程ニ城ハ水ニツマリテ常州人數ト合戰ハ八月六日シカ

要害ハ八月十一日依田一門高田一族シカ殿御内ハカロウ平六左衛門尉兄弟八人去間以上打死三百計シカ殿御上ヲハ小山田羽州給テ駒橋ヘ御同心申、去程ニ男女イケトリ被成候而悉甲州ヘ引越申、去程ニ二貫三貫五貫一貫ニテモ身類アル人ハ承ケ申、

天文十六丁未　此年モ信州甲州取合不止一年二度ヲ働キ被成候ハヤ奉公ノ人々ハ信州御陣ニ迷惑致候而不及言語此年世中半々ナレ𪜈錢飢渇ニテ御座、間賣買安シ世間ツマルヿ無限此年富寺ノ破葺イタシ候

天文十七戊申　此年世中十分ニ超タリ惣而地ヘ落ス程ノ物ハ一切吉世間富貴ナルヿ不及言説賣買ハ米五十粟壹斗大豆壹斗大麥一斗蕎麥一斗二十去程ニ六月導者ハ十年ノ内ニハ無御富士參詣申、此年二月十四日信州村上殿近所鹽田原ト申所ニ而甲州晴信様ト村上殿合戰被成候去程ニタガヒニ見合テ川ヲ小楯ニ取候而軍ヲイレツ亂レツ被食候去程ニ甲州人數打劣ケ板垣駿河守殿甘利備前守殿才間河

内守殿初鹿根傳右衛門殿此旁打死被成候而御方ハ力ヲ落シ被食、去共御大將ハ本陣ニシハヲ踏ミ被食候小山田出羽守殿無比類働被成候御上意様ニカセデヲオヒ被食去間一國ノ歎キ無限去共軍不止此年七月十五日信州鹽尻嶺ニ小笠原殿五千計ニ而御陣被成候ヲ甲州人數朝懸被成候而悉小笠原殿人數ヲ打殺シ被食候去程ニ取結候而村上殿近處ニ村井ト申、要害ヲ取立候而繁昌被成御持候此年八月十八日ニ佐久郡田ノ口ト申、要害ヘ小山田出羽守殿爲大將御働候去程ニ信州人數甲州衆ヲ籠ノ内ノ鳥ノ様ニ取籠申候ヲ色々調義被成候而來ル九月十二日御上意御馬ヲ出サセ申、而合力ニ被成佐久郡大將ヲ悉打殺ス去程ニ打取其數五千計男女生取數ヲ不知ソレヲ手柄ニ被成候而甲州人數ハ御馬ヲ御入候

天文十八己酉　此年ハ世中半分ニ而御座、去共前年ノ富貴此年迄ツマリニ成候而賣買ハ中ノ年ヨリ彌安シ此年卯月十四日夜中頃ナ井ユ

リ申、事無限言語同斷不及申五十二年サキノナ并程ト傳ヘ候餘リ
不思義サニ書付申、以上十日計ユリトホシニユリ申、此年菊月四
日常在寺坊肯周死去被申、去共御堂ハ造營成申、本願ハ法光坊ニ
而御座、此年霜月武田殿小山田殿談合被成候而地下ニ悉過料錢ヲ
御懸候殊更寺々稱宜如何樣成者ニモ押並テ御懸候去程ニ地下衆歎
ヿ無限此年霜月下淺間拜殿造營被成、番匠扳ヲハ祝衆イタシ候
大永十九庚戌　此年春錢ヲエルヿ不及言說六月ヨリ大雨降候而水出候
七月八月大雨大風吹候而世間致餓死ノ事無限此年九月一日ニ信州
戸石ノ雲戒ヲ御ノケ候トテ横田備中守ヲ始トシ隨分衆千人計打死
被成、サレ共御大將ハ能引被食、此アタリテハ小澤式部殿渡邊雲
州致打死、遠クハ國中皆捨候歎キ言語同斷無限サレ共信州ノ取合
不止此春中少童共兒ヲヤミ候而皆々死ヿ不及言說下吉田計ニテ五
十人計死申候余リノヿニ書付申、此年三月覺輪坊常在寺ヘ御移申

、程ニ庫裏御造リ
天文二十辛亥　此年春中去年ノ餓死ニ人ツマルヿ言語道斷無申計人ノ
餓死ルヿ無限蕨ヲ二月ヨリシテ五月マテホリ申、大葉蕨テ物ヲ作
リ申、大麥廿分ニ能御座、ヘ共春ノツマリガ打續候間四盃入ニテ
六升賣申、小麥三升十文ツ、賣買申、此年迄モ信州當國取合不止
八月朔日御陳ヘ立申候此年正月廿四日ニ松山宿燒申、刑部殿家ハ
燒申、此年世中惡ク御座、而尚世間ツマル此年霜月信州小笠原ニ
テ平瀨雲戒ヲ責落シ玉フ去程ニ當所ヨリ彌三郎殿御被官衆番積陣
立申、此年地下衆ヘ過料錢御懸、中々地下衆難義無申計、皆々所
ヲアケ申、
天文廿一壬子　此年正月廿三日小山田出羽守殿死去同廿五日申尅送葬
御供人衆一萬人ニ而送リ被食候次法華宗郡内一番ノ御弔被成、此
年正月風モ不吹暖ニ御座、此年七月御本寺ヨリ御大事ヲ越申、去

程ニ談義被成、而其上御本番ヲ懸申候信心ニ男女出家賽錢ヲ薙(ナケ)候事中々言説不及候悉ク壁ヲ打破申、去程ニ皆感泪ヲ流シ候其上若キ出家衆十六人ニ坊號ヲ授候後代ニハ有間鋪候間書付候此年信州御勸候小岩兵部雲戒ヲ責落シ被食候打取首五百余人足弱取ㄱ數ヲ不知此年吉田友屋ニツケ塚ノ宮内左衛門殿屋形御藏ヲ被立作去程ニ當寺ノ御本番ヲ此年菊月八日造リ申、本願ハ本行坊日祐取立申、同ク鬼子母神ヲモ造申、此年彌八方友屋ニ家ヲ廿四坪ニ作リ被申、此年草生ハ廿分ニ越申、カ風不吹オクテハ能御座、而作毛ニ不入實、此年霜月廿七日駿河義元御息女様ヲ甲州晴信様御縁武田大吉殿様ノ御前ニナホシ被食、去程ニ甲州一家國人ノキホヒ不及言説候武田殿ノ人數ニハ更ニ爰計付八百五十僕義元殿人數ハ五十僕御座、輿十二挺長持廿カラ女房衆ノ乘鞍馬百疋御座、兩國喜大慶ハ後代有間數候其内ニモ小山田彌三郎殿一國ニ而御勝レ候

天文廿二癸丑　此年世中廿分賣買何モ安シ六月導者富士ヘ參詣多ㄱ不及言説去程代ツカヒ能御座、ㄱ近年無之候此年信州村上殿八月鹽田ノ要害ヲ引ノケ行方不知ナリ候一日ノ内ニ要害十六落申、分捕高名足弱イケ取申、事後代ニ有間數、日照ルㄱ五月ヨリ八九月迄照候而水皆ヒ申、此方ノ冬水チガヒ申、去程ニ大麥違ヒ申、去ㄈ賣買壹斗小麥四升賣申、此年出家禰宜衆地下衆主持不申、者過料錢ヲ懸候而皆々ナケキ申、ㄱ不及言説

天文廿三甲寅　此年正月雪水富山ヨリ出申、ㄱ正二三月迄十一度出申、余リ不思義サニ書付申候世間富貴成ㄱ先代ニ無御座、六月導者ハ無御座、錢ヲエリ申、ㄱ先代未聞無御座、賣買ハ安ク候ヘ共錢飢渇ニテ候此年ノ艸生三十年以來無御座、人々ナヤミ申候無限腹ヲ煩候而大槩死去申、此年七月駿河ノ屋形様ヘ相州屋形様ノ御息女様ヲムカヒ申、御供人數ノキラメキ色々持道具我々ノ器量程被成

丶去程ニ見物先代未聞御座有間敷丶請取渡ハ三島ヲ御座候日ノ照申丶丁不及言說余リ不思義サニ書付申丶此末七月廿四日武田晴信様信州へ御馬出候夫ヨリ雨降不申丁無限大原海大概ヒ申丶三年續テ照候間ケ様ニヒ申丶賣買米四卡小豆五卡大豆六卡大麥壹斗小麥四卡秋世中未見候草生ハ天下一ニテ候此年八月六日ニ佐久郡要害一夜ニ九ツ落申丶此年御曹子様始而御馬ヲ信州へ出シ被食候而思フ程切勝被成丶此年小室自ラ落申丶トテ内山ノ人數ヲオシツケニ乘リ候而三百計打取去程ニ上意様大慶滿足被成丶事無限去程ニ木暮殿モ笠殿モ競ヒ御出仕被成候此年八月十三日夜亥尅ヨリ丑ノ時迄大風吹候而十分ノ世中一切皆無御座丶家ヲ皆吹タフシ人馬ヲ皆打殺シ申候吉田ハ千軒ノ在所ニ直クナル家一モ無御座丶大竹屋ノ内室ヲ打殺シ申丶同子モ死申丶此年八月下淺間鳥居コロヒ申丶此年河尻マルヒ取申候而森ノ下ヘ水ヲ流シ申丶此年十月ニ信濃ノ知

久殿親子ニ一人以上八人大原ノ島ヘ流サレ玉フ大原地下衆三人番ニテ守リ申丶此年冬雪不降路次一段能御座候此年余リ暖氣ニ候而芋生申丶事無限皆穴ヨリ取出シ候而一兩日サマシ申丶而又穴ヘ取入候此年極月武田晴信様ノ御息女様ヲ相州氏康ノ御息新九郎殿ノ御前ニ被成候去程ニ甲州一家國人色々様々ノキラメキ或ハ熨斗付或ハカヒラケ或ハカタ熨斗付或ハ金覆輪鞍輿ハ十二挺氷波女ノ役ハ小山田彌三郎殿被成丶御供ノ騎馬甲州ヨリ三千騎人數ハ一萬人長持四挺二挺請取渡ハ上野原ニテ御座丶相州ヨリ御迎ニハ遠山殿桑原殿松山殿是モ五千計ニテ罷越候去程甲州人數ハ皆悉小田原ニテ越年被食候小山田彌三郎殿ノ御内ニハ小林尾張守殿氏康ノ御坐ヘ參候加様成儀ハ末代有間敷候間書付申候此年迄信州和久殿ハ大原ノ島ニ御座丶

天文廿四乙卯　閏月十月也　此年正月暖氣ニ御座丶二月モ暖ニ御座丶五

月廿八日信州知久殿與四郎殿舟津ニテ生害被成、宮下勘六方打被申、去程此年七月廿三日武田晴信公信州ヘ御馬ヲ被出候村上殿高梨殿越後守護長尾景虎ヲ奉頼同景虎モ廿三日ニ御馬被出候而善光寺ニ御陣ヲ張被食、武田殿ハ三十丁此方成リ大塚ニ御陣ヲ被成候善光寺ノ堂主栗田殿ハ旭ノ城ニ御座候旭ノ要害ヘモ武田晴信公人數三千人サケハリヲイル程ノ弓ヲ八百張鐵炮三百挺入候去程ニ長尾景虎再々責候ヘ共不叶後ニハ駿河今川義元御扱ニテ和談被成、壬十月十五日雙方御馬ヲ入被食、以上二百日ニテ御馬入申、去程ニ人馬勞無申計、此年錢南京ト云錢出來候而代ヲエルヿ無限此年富士山北室行者堂立候去程ニ護摩堂ヒ上葺小林善三殿本願ニテ被成候此年閏十月十日ニ王吉田西念寺ヘ御着候去程ニ地下侍出家男女皆々參候事無限一夜御座、而川口禪應寺ヘ御越候此年駿河義元ノ御内ヲ異見申候者說最ト申御出家閏十月九日御死去被成、駿河

力落不及言說此年相州新九郎殿霜月八日曾子樣ヲ投ケ玉フ甲州晴信公御滿足大慶此事候

弘治二丙辰　此年春賣買一切安シ乍去世間ツマルヿ不及言說錢飢渴ニテ御座、此年小林尾張守殿貞親井土ヲ田ニ御ホリ候又小山田彌三郎殿御被官探題御座、而地下衆歎モアリ善モ御座、殊更尾州吉田衆ニ非分多ク候間二十人ヒキワカサリ其内ニ御家人交リ谷村ヘ下リ久敷詰候ヘトモ御捌無ク候トテ府中ヘ越被申候屋形樣ノ御意ニテ悉廿人衆ノ道理ニ御捌候去程ニ尾張被官ヲハ屋敷搦ニ被拂申、此年吉田廿人ノ寄子モハナシ彌三郎殿ヘ馬マハリニ被成、其上於下吉田小林和泉殿ヨリ非分多ク候間百余人談合申小山田殿ヘ下リ被申候處ニ境ノ彈正殿ヲ頼申一日ノ内ニ使ヲ三度迄下シ下吉田衆ヲ留候テ給候ヘト色々詫言被成候ヘ共更ニ理ヘンツキ不申候間小林文三殿八月ヨリ來正月迄府中ニ被詰候去間小山田彌三郎殿色々詫

言晴信様へ御申上申候而文三殿ヲモ郡内へ御歸シ候去程ニ谷村下吉田地下衆ヲ呼下シケツハラサセラレ彌三郎殿御意ニテ小林和泉守殿出不被成候乍去和泉寄子被官ヲハ押離シ申候

弘治三丁巳　二月奉行方皆々御上候而カナタコナタト御覽シ候其時小林市兵衛殿與二郎左衛門殿同左近殿惡口ヲ被申候去間谷村ヘ罷下候ヘハ悉下吉田ノ百余人ノ道理ニ御捌候而地下衆被御歸候其年ノ十月堰道具ニ宮林ノ松木ヲヲリ候ヘハ一兵衛殿御出、而切物ヲ取其上人足ヲ散々ニタ、キ被申、間下吉田百余人衆松山ヘオシカケ質物ヲ取反シ被申、ヘハ松山ヨリ信濃陣迄人ヲ御越彌三郎殿ヘ披露被申、ヘ共別義無之、結句其時從國中御上様迄越被申、折節殿様ノ御意ニテ下吉田ヘ奉行人ヲ御上セラレ百余人衆ト松山下ノ中ナホシ御座、其年ハ十二月日テリ、而芋悉ヤケカレ、去程ニ其冬中暖氣ニ御座候此年悉ク飢渇入ル丁無限

ヲ恐ルヽ

永祿元戊午　此年八月五日大風吹申、乍去秋世中粟半耕作同芋半世中殊ニ大麥小麥半世中稻大豆小豆ハ廿分ニ出來候而賣買何モ安シ

永祿二己未　正月小二月大　正月申日雪水出、而悉田地家村ヲ流シ、就中此年二月信州ヘノ番手ヲユルシ、而又谷村御屋敷普請同ツホノ木又サイカチ公事ナトヲモ祝師衆計不致ユルシ候而宮ノ川ヨケヲ被成其上彌三郎殿御意ヲ以テ宮林ノ木ヲ祝師衆マ、ニ被成小林尾張殿奉行ニテ宮林ヲ伐リワタヲ立被納、然者小林和泉殿宮林ヲ爲伐間敷由二三度押被申、ヘ共祝師衆皆々不用シテ彌三郎殿御下知ニテ用ノ程伐、而宮ノ致川ヨケ申候

同其年ノ春ハ賣買何モ安シ

同年四月十五日大氷降夕顔茄子麻稗苗殊ニ鶯菜悉打折何モ無シ大麥ハ半分コホシ、　就中庚戌年八月小林宮内少輔殿河ヨケ普請ニ新居左近地付ノ林ヲ伐、而堰、ヘハ其過急トシテ下吉田百余人ノ

所ヨリ質物ヲ一兵衛殿取被申、ヲ皆々道理ヲ申分、間松山ヨリ悉ク質物共ヲ反シ被申、へ共左近同法林坊質物計不被返、間打置申、處ニ己未年四月慥ニ小山田殿御意ニテ手取二ツ新鍬一勺拾年ト申反シ被申、之間目出度請取申候

永祿二己未年十二月七日ニ大雨降俄ニ雪シロ水出テ法ケ堂皆悉流レ申、又在家ノ事ハ中村マルク流シ、ヿ無限

永祿三庚申年二月廿日大雪降鹿島無殘被取申事無限、　此年六月前ハ日ヨリ同六月十三日ヵ雨降始來ル十月迄降續、間耕作以下何モ無之、去程ニ己未ノ年疫病流行悉人多死ヿ無限、惣而酉ノ年迄三年疫病流行村郷アキル、ヿ無限導者之事ハ二月ヨリ八月迄參申、

永祿四辛酉年正月二月大雪降積リ新ニツマルヿ無料間、此年ノ大麥賣買ハ五月七升也同小麥ハ四卡十文サシ賣、也秋世中半作ニテ、へ共賣買ヤスシ

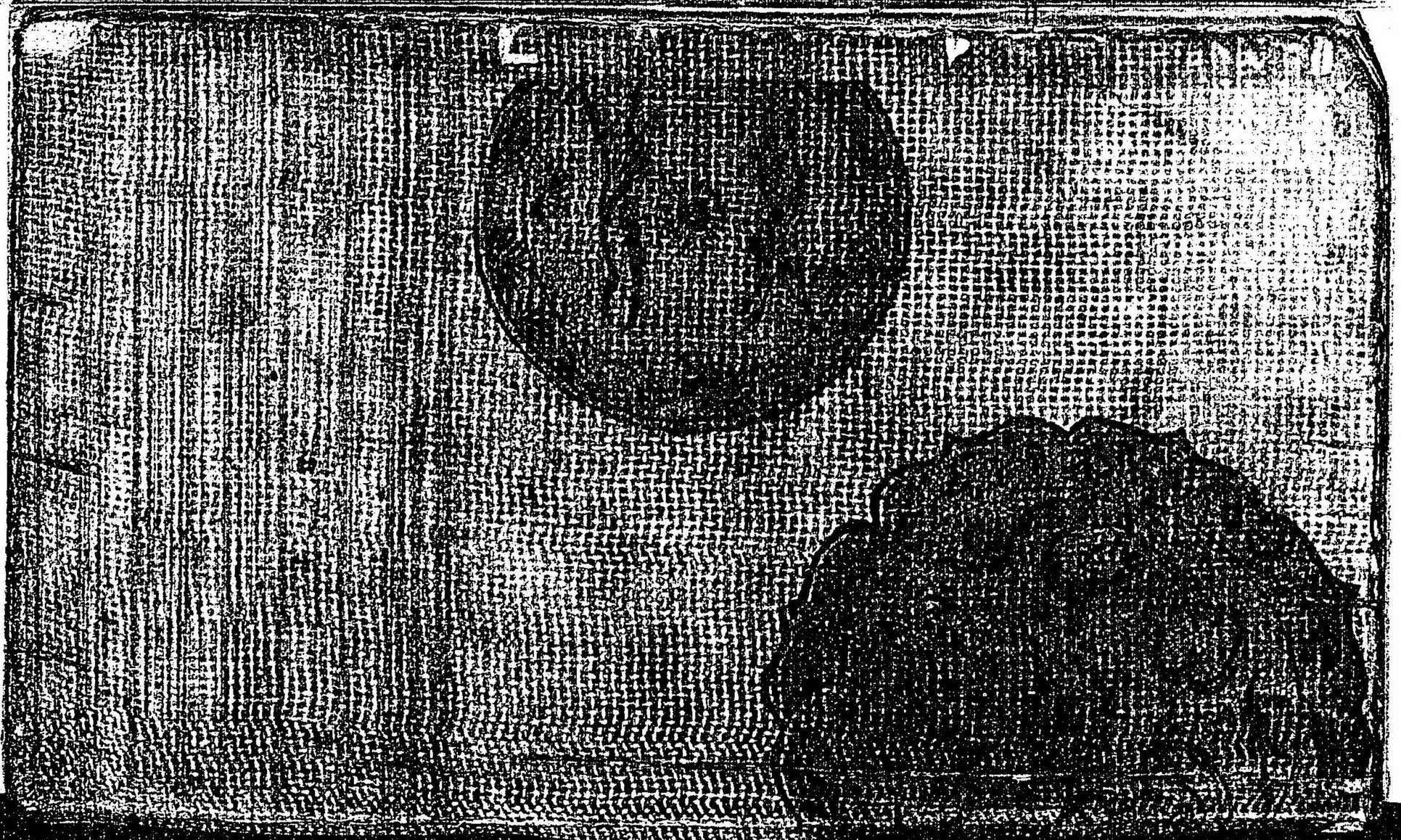
此年ノ十月十日ニ晴信公景虎ト合戰被成、而景虎悉人數打死イタサシ申、甲州ハ晴信御舍弟典廐ノ打死ニテ御座、就中郡内彌三郎殿ハ御立無ク候而人衆計立候へ共ヨコイレヲ被成候而入クツシ近國へ名ヲ上ケ被申候

妙法寺記卷下畢

69
50
7

妙法寺古記錄二卷、所傳於甲斐國都留郡木立村妙法寺也、村在富士北麓吉田邑西坂東路十許里、俗呼西方八村之一也、日蓮宗之古道場、而今尚存云、此記起於文正元年、終於永祿四年、九十六年間、甲駿越及坂東諸國之事蹟可徵者最多、亦字體升作卡、彼作皮、管作官者、省字也、候作丶、事作丁、外作亻者、略字也、或石訓加多之、痘訓毛、劣訓萬久、捌訓左八久等古訓、而共益於考古之學者、不爲不多、豈可不喜乎、文化十五年四月、九日東都松屋主人源與清識、

記錄中、如江與へ、雲與雪、賈與買、岩與石、宛與宛、處與所、當與常、賢與賀、陳與陣、年與事、結與詰、逼與逗、遣與遣、寨與寨、繩與綱、貞與奠、鍋與餓、鋪與敷、詫與託之類、雖魯魚可疑、亦有不可疑、悉從原本而不改、活刻刷印公諸世、管見旁加朱圈、以正後之君子焉、

文政九年孟秋上幹、江戸蓮堂小林峽源正與校書于注子之寓居、

村岡良弼所藏本